【句釋】刺は『傳』に責なり、天何を以てか王を責めて變異を見はすや、神何を以てか王を富ましめざるや、王が婦人の爲めに自から招く罪と言はずして、天と神とに托して言ふ、詩人の情溫厚なる所なり。舍爾介狄、介は甲、狄は遠、甲遠は卽ち我が患を爲す者なり、其の患を爲す者を舍て置きて、維予胥忌、忌むに及ばざる予を忌むは良藥口に苦ければ也。不弔不祥、弔は閔なり、王は此の不祥事を弔へずして、威儀不類、類は常流なり、王が威儀を愼しまざる常流にも類せず。人之云亡、善人は災變等の不祥事を見て亡げ去る。邦國殄瘁、善人の輔佐する者なきときは邦國其れ遂に殄び瘁むなり、王が婦人を信用することを文字外に出さず、而して其の理明明、詩の妙是に於て在り。

天之降罔　維其優矣　人之云亡　心之憂矣　天之降罔　維其幾矣　人之云亡

心之悲矣

天の罔を降す、維其れ優矣、人の云に亡き、心の憂矣、天の罔を降す、維其れ幾矣、人の云に亡き、心の悲矣、

【句釋】罔は罟なり。優は多なり。幾は近なり。天の罪罟を降すこと多くして、罪無き善人まで之に繫る、是に於てか善人は逃げ去て亦救ふものなし、我が憂ふる所以、而して愚人は禍の身に幾づくを知らず、我之を悲しむとなり。





瘨沸檻泉　維其深矣　心之憂矣　寧自今矣　不自我先　不自我後　藐藐昊天

無不克鞏　無忝皇祖　式救爾後

瘨沸たる檻泉、維其れ深矣、心の憂矣、寧ぞ今よりならん、我より先ならず、我より後ならず、藐藐たる昊天、鞏うすること克はずといふこと無けん、皇祖を忝しむること無くんば、式て爾が後を救はん、

【句釋】瘨沸は泉の湧く貌。檻泉は正しく泉の湧き擧がる者。維其深矣、泉の深きは泉の盡きざるを言ふ。心之憂矣、寧自今矣、憂の深きこと亦泉の如く、今突然湧き出たるにはあらず、褒姒なる哲婦が宮中に入りしを聞きし時よりなり。我先、我後、哲婦の惡事を爲す、我が生先か或は我が生後かの孰れかにあらば、心配せざるも、今日眼前にあるを如何ともする無し。藐藐は天の大を形容す、天は大なり、必ずや人道を鞏固にすること克はずと云ふの理あらんや。無忝皇祖、式救爾後、王若し前非を悔い之を改むるに於ては皇祖の靈も守り遂に子孫を全うするを得ん、然らずんば災禍は爾が後にも及ばん。

【評論】瞻卬は七章、而して三章は十句、四章は八句を以て成る。『序』曰く、此の章は凡伯卽ち大夫が幽王の大壞を刺るなり。今謂ふ此の如き哲婦の爲め惱まさるる者獨幽王のみならず、而かも哲婦の罪は言ふに足らず、王の愚や憐む可きなり。

旻天疾威　天篤降喪　瘨我饑饉　民卒流亡　我居圉卒荒

旻天疾威、天篤く喪を降し、我を饑饉に瘨ましむ、民卒く流亡し、我が居圉卒く荒る、

【句釋】天に就て春は昊天、夏は蒼天、秋は旻天、冬は上天に分つ。(或ハ春蒼、夏昊ト曰フ)四時に分たざるときは旻は閔にて仁覆閔の義に取る、天は生物を閔む也。此の章の旻は閔の義に屬す。疾威は暴虐なり、民を閔むべき天が反對に暴虐する。篤は薄の反對、痛く喪亂を降す也、喪は民の死する也。瘨我饑饉、瘨は病む也。國中饑饉に瘨病する。居圉、圉は「ホトリ」陲と訓す。人民の居處邊陲に至るまで盡く空虛と爲る。天の威怒甚だ急暴にして、其の降す所の喪亂甚だ厚く、我を病ましむるに饑饉を以てし、斯の民を盡く以て流亡せしめ、內は國中、外は邊境、悉く皆荒虛するなり。幽王の失政を刺るなり。

天降罪罟　蟊賊內訌　曷椓靡共　潰潰回遹　實靖夷我邦

天罪罟を降し、蟊賊內訌す、曷椓共めること靡し、潰潰たり回遹、實に我邦を靖め夷げしむ、

【句釋】內訌は外攻の反對、家の內より潰し來るなり、訌は爭訟して人を相陷いるの言なり。王刑罪を施して天下を羅網す、衆殘酷を爲すの人、外は人を害すと雖も、又自から內に爭うて相讒惡するなり。『箋』曰く、曷椓は奄人なり、曷は官名、椓は陰を椓毀(去勢)する者なりと。曷は闇なり、信ずべし。朱子曰く、曷亂椓喪の人と。奄人も曷亂椓喪の人たるは勿論なるが、今の意にはあらざる可し。奄人の不





具者は敢て其の職事を共むこと靡し。潰潰然として回遹を是れ行ふ、回遹は邪僻なり、然るに王は此の如き愚劣の小人をして我邦を靖め夷らげしめんとす、其れ誤らずや。

皐皐訿訿　曾不知其玷　兢兢業業　孔塡不寧　我位孔貶

皐皐訿訿するは、曾て其の玷けたることを知らず、兢兢業業として、孔だ塡しく寧からず、我が位孔だ貶つ、

【句釋】皐皐は『傳』に頑にして道を知らざるなり。朱子曰く、頑慢の意。訿訿は『傳』に窳にして事を供せざるなり。朱子曰く、務めて謗毀を爲すなり。窳は病なり、訿訿の解は朱に從ふ。曾不知其玷、玷は『箋』に缺とあり。兢兢は戒なり。業業は危なり、天下の人孔だ塡しく戒懼危怖するなり。我位孔貶、我が位も永く保つ能はず、動もすれば貶黜せらるるなり。

如彼歲旱　草不潰茂　如彼棲苴　我相此邦　無不潰止

如彼の歲旱の如き、草潰茂せず、彼の棲苴の如し、我此の邦を相るに、潰止ざるは無し、

【句釋】潰茂の潰は『傳』に遂なり、草が青茂するは其の性なれど其の性を遂る能はずとなり。棲は木の上に宿する也。苴は水中の浮草。水中の浮草の木の上に棲むが如く、旱天に遇うて生氣無き也。我相此邦、無不潰止、天下國家遂に潰れざる無し、幽王が民人を枯渴せしむること、恰かも旱天の如し。

維昔之富　不レ如レ時　維今之疚　不レ如レ茲　彼疏斯粺　胡不二自替一　職兄斯引

維昔の富めりしは、時の如くならず、維今の疚ましきは、茲の如くならず、彼は疏斯は粺、胡ぞ自から替れざる、職ら兄ふること斯引し、

【句釋】如時、如茲は卽今を言ふ、昔日の富すと言ふは仁者賢者を富すに在り、今日の富すと言ふは讒佞者に在り。疚は病、今日は賢者を病しむ、古の王は賢者を禮遇して病しめざるに今日は然らず。彼疏斯粺、疏は麤糲極めて惡米、粺は精粺極めて良米なり、小人は疏にて、君子は粺なること當然なり、今日の賢者は疏を食ひ、小人は粺を食ふ。胡不自替、替は改替、小人胡ぞ改替せずして、却て進むの長引するは洵とに是れ兄ふ可しとなり。兄は悅と同じ。

池之竭矣　不レ云レ自頻　泉之竭矣　不レ云レ自中　溥斯害矣　職兄斯弘　不レ裁二我躬一

池の竭矣、頻よりすと云はず、泉の竭矣、中よりすと云はず、溥く斯害へり、職ら兄ふると斯弘なり、我が躬に裁びあらざらんや、

【句釋】頻は『箋』に濱に作るべしと。池水の竭るは其の濱厓より水の以て之を益す無きに由る。『傳』に頻は厓と、厓は外なり、自は由なり、王を池水に譬へ、濱を賢臣に喩ふ、泉水の竭るは中より出ざるに由る、池は外より入らず、泉は中より出でざれば竭く、良に自明の理なり、然るに此の自明の理を小





人は言はず。溥は廣なり。弘は大なり。裁は災と同じ、佞人共制止する者無きに依て恣に其の害を廣くし、我專ら之を憂ふるも亦大なり、遂に我が躬の上にも災害來らんかと哀しむなり。

昔先王受レ命　有レ如二召公一　日辟レ國百里　今也日蹙レ國百里　於乎哀哉　維今之人

不レ尙レ有レ舊

昔先王命を受けしとき、召公の如きあり、日に國を辟けること百里、今也日に國を蹙むること百里、於乎哀しい哉、維今の人、舊あるを尙ばざらんや、

【句釋】先王は文王と武王なり。召公は召康公なり。召公を以て多くの賢臣を代表す。辟は開。蹙は促。朱子曰く、文王の化、北より南し、江漢の間に至る、服從の國日に以て益す衆し、虞芮質成に及んで其の旁の諸侯之を聞て相率ゐて周に歸する者四十餘國、今は幽王の時を謂ふ。國を促むとは、蓋し犬戎內に侵し、諸侯外に畔く也。於乎は嗚乎と同じ、長嘆息する也。不尙有舊、『箋』は尙を尊の意に解す、朱子は猶と解す。今『箋』說を取る。舊德あるの臣を尊任せざるを哀しむ也。徐士彰曰く、末句の不尙有舊は之ありて用ひざるを言ふ、意言外に在り、凡そ古人の文、辭義逐一圓滿、原虧缺無し、後人の注脚を待たず、此れ諸經より皆然り、然れども諸經の意は辭に盡く、讀詩に至りては、全く其の不言の旨を領せんとを要す、孟子詩を說く法の如き、切に肯綮に中る、趙岐所謂尤も詩書に長ぜりとに妄言に非ず、

蓋し一切粘皮帶骨せば、全く詩の理にあらず、此の義を了せずんば、未だ與に傳注を讀むべからず。

【評論】召旻は七章、而して四章は五句、三章は七句を以て成る。『序』曰く、召旻は凡伯幽王の大壞を刺るなり、旻は閔なり、天下召公に如くの臣無きを閔むなり、小雅に小旻あり、大雅に於ては召旻と稱す、混ずる勿れ、周南は周公、召南は召公に係る、化の盛は二公に待つあり、化の衰ふる豈二公を懷はざらんや。

蕩の什十一篇九十一章七百六十九句。





# 頌四

## 周頌清廟の什四の一

頌は宗廟の樂歌、盛德の形容を稱美して其の成功を以て神明に告ぐる者なり。疏曰く、此れ特に周頌を解するのみ、魯商の頌は則ち是れに異なる、商頌是れ祭祀の歌と雖も、其の先王の廟を祭り、其の生時の功を述ぶ、正に是れ死後功を頌す、成功を以て告ぐるにあらず、其の體周頌に異なる。魯頌は僖公の功德を詠ずるを主とす、纔かに變風の美なる者の如きのみ、又商頌と異なるなり。周頌は三卷、魯頌は一卷、商頌は一卷、三頌總て五卷なり。

於穆清廟　肅雝顯相　濟濟多士　秉文之德　對越在天　駿奔走在廟　不顯不承　無射於人斯

於穆たる清廟、肅雝顯相あり、濟濟たる多士、文の德を秉れり、天に在せるに對越し、駿く廟に在せるに奔走せり、顯ならずや承らずや、人に射はるること無し、

【句釋】●於は歎辭。穆は『傳』に美なりと。朱子曰く、深遠なり。今朱說を取る。●肅雝は敬和なり、敬

は嚴なるも和を以て其の嚴を節するなり。顯相は顯明なる助あるなり、時に祭事を助くる者卽ち公卿諸侯を美めて言ふ。濟濟は多き貌。祭に關係する士多きなり。秉文之德、文王の德を秉り行ひ以て文王の靈に告す。對越在天、越字は於と同じく意味なし、文王の在天の靈に對すとなり。駿は字の如く大なり疾なり。奔走在廟、祭事に關係する者奔走の勞を辭せず皆廟に在る、事を執て厭ふこと無きなり。不顯不承、無射於人斯、文王の德は顯なり、然らば之を尊奉（承）せざらんや、文王の德永く人に射はるること無きこと亦知る可し、此の詩は周公都邑を洛に營み功漸く成る時、成王を助けて、諸侯を新都に會し、此等の諸侯を引て文王の廟を祭る時の樂歌なり、實に周公攝政の第七年なり、周公が成王を相けて諸侯を朝せしめ、周公が南面して諸侯の朝を受けしにはあらず。清廟は一章八句。

維天之命　於穆不已　於乎不顯　文王之德之純　假以溢我　我其收之　駿惠我文王　曾孫篤之

維天の命、於穆として已まず、於乎顯かならずや、文王の德の純なる、假を以てか我を溢まん、我其れ之を收けん、駿に我が文王に惠はん、曾孫之を篤うせん、

【句釋】維天之命、『傳』曰く、大なる哉天命の極まり無き、周の禮を美むるなり。『箋』曰く、命は猶ほ





道のごときなり、天の道於乎美なる哉。於穆不已、動て止まず行うて已ざるなり。不顯、文王之德之純、文王天道に純にして亦已まず、純なるときは二無く雜無し、已まざるときは間斷先後なし。假は何。溢は『箋』に盈溢の言とあり。朱子曰く、溢は恤の訛なり、何を以てか我を恤まん。我其收之、文王の神靈何事か我に恤むものあらば我は當に之を受くべし。駿は大、惠我文王、大に文王の道に順ずるなり。曾孫篤之、後王も亦當に篤く怠らざるべし。輔氏曰く、上四句は文王の德、天と一たるを言ひ、後四句は己と後王と皆文王の已まざるの德に法るべきを言ふ。維天之命は一章八句。

維清緝熙　文王之典　肇禋　迄用有成　維周之禎

維清うして緝熙なるは、文王の典、肇めて禋り、用ふるに迄まで成ること有り、維周の禎なり、

【句釋】維清緝熙、清は清明なり。緝は續。熙も明。文王の業子孫續ぎて孔だ明なり。文王之典、典は憲法、『箋』曰く、敗亂の政無うして清明なるは乃ち文王征伐の法あるが故なり。肇禋、肇は始、禋は祀、文王命を受て始めて天を祭り征伐する、周禮に禋祀を以て昊天上帝を祀る。迄用有成、文王征伐の法、今に至るまで之を用ひて成功あり、紂を伐て克く勝ちしを謂ふ。維周之禎、禎は祥、征伐の法乃ち周家天下を得るの吉祥なり。此の詩恐くは闕文あらんと朱子言へり、或は然らん。『序』に象舞を奏する

歌とせり。『辨志』曰ふ此れ亦文王を祭るの文と。維清一章五句。

烈文辟公　錫茲祉福　惠我無疆　子孫保之　無封靡于爾邦　維王其崇之　念茲戎功　繼序其皇之　無競維人　四方其訓之　不顯維德　百辟其刑之　於乎前王不忘

烈文なる辟公、茲の祉福を錫ふ、我を惠しむと疆無く、子孫之を保つ、爾の邦に封靡すること無くば、維王其れ之を崇ばん、茲の戎功を念はば、繼ぎ序で其れ之を皇にせん、競きこと無からんや維人、四方其れ之に訓ふ、顯かならざらんや維德、百辟其れ之に刑る、於乎前王忘れられず、

【句釋】烈は『傳』に光とあり、光文ある百辟卿士。辟公は一人の名に非ず、諸侯を言ふ。錫茲祉福、惠我無疆、子孫保之、『箋』曰く、惠は愛なり、天下の諸侯は天之に錫ふに此の祉福を以てす、又長く之を愛して期竟あると無く、子孫保んじて之に居るを得、文王武王純德を以て命を受け天位を定むるを謂ふ。無封靡于爾邦、朱子曰く、封靡の義は未詳。或は曰ふ封は利を專にして以て自から封殖するなり、靡は汰侈なり。『傳』曰く、封は大、靡は累なり。『箋』曰く、大に汝の國を累ると無ければ、諸侯國を治めて罪惡無き也。『辨志』曰く辟公我に於る此の如し、我の辟公に於る何如、念ふに爾が平日の爾が邦に在る





や、封ずると無うして之を取るに制あり、靡すると無うして之を用ふるに節あり、維王固とに禮を隆にして之を尊崇すと、要するに諸侯は己が國を國として守り、叨りに蠶食など爲すなかれとの意。維王其崇之、王が崇ぶ以上は諸侯が請はざるも其の封を增すと也。念茲戎功、王は爾が來りて我が祖祭を助くる錫福の大功を念ふ。繼序其皇之、我が王位も繼ぎ序で、爾が侯位も繼ぎ序で其れ之を益す皇大にせん、君臣相扶け以て世を治めんとの意に外ならず。無競、『傳』に競は彊なり。維人、凡そ生者は人より彊きは無し。四方其訓之、『傳』に訓は道なり。不顯維德、凡そ天下の事德より顯なるは無し。百辟其刑之、刑は典刑、卽ち法なり、王も侯も德を以て典刑とせざるは無し。於乎前王不忘、此の如くにして念ひ來れば前王の賢德功業は決して忘るる能はざる也。顧氏曰く、前王は卽ち廟中の所見、前王を忘れざるは、卽ち廟中の人、現前に就て喚醒す、極めて佳なり。烈文は一章十三句。序曰く成王政に卽て諸侯祭を助くる也。

天作高山　大王荒之　彼作矣　文王康之　彼徂矣　岐有夷之行　子孫保之

天高山を作し、大王之を荒む、彼作し、文王之を康んず、彼の徂くや、岐に夷なる行あり、子孫之を保つ、

【句釋】天作高山、先王を祭るに就て之を言ふ。『傳』曰く、天萬物を高山に生ず。大王荒之、大王道を行ひ、能く天の作す所を安んず。『箋』曰く、高山は岐山なり。『書』曰く、岍及び岐を道し、荊山に至る、

天此の高山を生じ、雲雨を興し以て萬物を利せしむ、彼は大王を指す。作矣は卽ち荒むなり。文王康之、康は安康、大王之を闢き、文王次で民を安康にす。彼徂矣、『箋』曰く徂は往なり。朱子曰く、徂は險僻の意なり。徂を解して强て岨と爲すは經意にあらず、邠より岐に往くなり、故に宋儒の說今取らず。岐有夷之行、夷は平夷、平夷の道あるなり。子孫保之、『辨志』曰く、此れ大王を祭る詩、祖宗建國必ず根本の地あり、開創の功其れ忘る可んや、彼の天高山を作す、王を興すの基と爲す可し、大王天を承て創業、卽ち邠由り此に遷る、而して以て之を治む、人物盛んにして都會開き、乃ち平易の大道あり、子孫世世之を保ち、永く萬國朝宗の極と爲す。天作は一章七句、首尾岐を主として之を言ふ。

昊天有成命　二后受之　成王不敢康　夙夜基命宥密　於緝熙單厥心　肆其靖之

昊天成命あり、二后之を受く、成王敢て康んぜず、夙夜命に基き宥密にす、於緝熙にして厥の心を單せり、肆ゆゑに其れ之を靖んぜり、

【句釋】成命は天命と同じ、一定して變らざるが成なり。『箋』曰く、言ふ心は周は后稷の生るるよりして已に王命あるなり。二后は文王と武王、文武の二后、其の祖に繼ぎ天命を受るなり。成王は朱子は武王の子の成王と爲す。『箋』曰く文王武王、其の業を受け、道德を施行し、此の王功を成し、敢て自ら安





逸ならざる也、乃ち朱說に依れば文王武王成王との三人。『箋』に依れば成王は名にあらずして文王武王が王業を成したる也。此の二說を判ずるは容易ならざる如きも、今姑らく朱子に依て成王と定む、文王武王に創業の君にして、守成には屬せず。守成の君は成王より始まれば、今以て成王が日夜祖業を追勉して少しも安逸ならざる狀に在ると解し妨げ無き者の如し。姚承菴曰く、成王、成命を保ちて盛治を致せるは、全く、敢て康んぜざる一念の上に在りと。基命宥密、宥は寬、密は寧、又宥は宏深、密は靜密、夙夜に德を積んで戒愼恐懼するの謂なり。於緝熙單厥心、單は厚なり、竭なり。肆其靖之、肆は故今と訓す、故字は是、今字は尙ほ可否の間に在り。徐子彰曰く、之を靖ずるは、事に休養安輯の意あり。蓋し文武開創、方に天下に興ふるに耍始を以てして、而かも未だ天下に興ふるに休息を以てするに及ばず、成王の靖は文武の功を終ふる所以なり。嗚乎徐氏は朱家に忠にして、又學に厚しと謂ふ可し。

【評論】昊天有成命は一章七句。『序』には天地を祀る詩と言ふ。朱子は成王を祀る詩と。漢唐を主とする學者は前說を取るならんが、余は主張する所無く、唯經文を經文として自から信ずる所に據る、今朱子を以て可と考ふるに依て乃ち成王を祀る詩と定む。『辨說』曰く、周公の制作、亦其の當時の事に及んで止むのみ、若し乃ち後王の廟に、奏する所の樂は、自から當に時に隨つて附益すべし、商の玄鳥の若きは、武丁孫子の世に作られたり、漢の廟樂も、亦時に隨つて耍定せり、豈周の後王のみ乃ち獨其の先

王の功德を褒顯することを得ずして、必ず周公を改むるを以て嫌を爲すこと有らんや。『古義』に曰く、鄒忠胤云ふ、竹書紀年に、康王二年、先王に吉禘し、樂章を更定す、とあるは、此類のみと。

我將我享　維羊維牛　維天其右之　儀式刑文王之典　日靖四方　伊嚴文王　既右享之　我其夙夜　畏天之威　于時保之

我將め我享る、維羊維牛、維天其れ之を右にせん、儀り式つて文王の典に刑らん、日に四方を靖んじ、伊の嚴したまふ文王、既に右に之を享く、我其れ夙夜、天の威を畏る、時に之を保たん。

【句釋】將は『箋』に猶ほ奉養のごとしとあり。我享、維羊維牛、維天其右之、文王を明堂に祭り、以て上帝に配する時の樂歌なり。享は獻なり、獻ずる者は何ぞや、曰く肥盛なる羊牛なり、而して其の祭る明堂の位置、帝は中に居し、文王は西南に居し、主皆西坐して東に向ふ、東は左にして西は右、則ち饌左に在て、而して神右に在るなり。『箋』は右を助の義に取る、宋儒の說を勝れりとす、乃ち上天が羊牛の右に在すなり。儀式刑の三字は義は皆一、文字の使用法として此の妙を爲すのみ。文王之典、儀式は則ち象と爲す、法に象どりて文王の常道を行ふなり。日靖四方、四方は卽ち天下。伊嚴、福を受るに嚴と曰ふ、祭る者は福を文王に受るなり。既右享之、文王の神は右に在て之を享く。我其夙夜、畏天之





威、于時保之、呂東萊曰く、天の威を畏ると言うて、文王に及ばざるは尊に統るなり、天を畏るるは、文王を畏るる所以、天と文王と一なり。問ふ文王を明堂に祀る、周公義を以て之を起す、古禮にあらず、知らず周公以後、將に文王を以て配せんとするか、時王の父を以て配せんか。朱子曰く、諸儒正に此の二義を持して今に至り決せず、且周公禮を制する、武王成王の時に在ることを知らず、若し成王の時に在るときは、文王乃ち其の祖なり。又問ふ周公に繼ぐ者は當に何如すべきや。曰く只有功者を以て之に配せん。又曰く昔者周公文王を明堂に宗祀して乃ち武王を言はざるものは、禮樂周公の制作に出るを以ての故に禮樂を作る者を以て之を言ふ。此の章に就ての議論此に竭ず、今は姑らく略す。我將は一章十句。

時邁其邦　昊天其子之　實右序有周　薄言震之　莫不震疊　懷柔百神　及河喬嶽　允王維后　明昭有周　式序在位　載戢干戈　載櫜弓矢　我求懿德　肆于時夏　允王保之

時に其の邦に邁く、昊天其れ之を子とせん、實に有周を右び序で、薄らく言に之を震かさん、震疊せざるは莫し、百神及び河喬嶽を懷柔せり、允に王は維后なり、有周を明昭にし、序に式とり位に在り、載ち干戈を戢め、載ち弓矢を櫜にし、我懿德を求めて、時夏に肆ぬ、允に王之を保てり、

【句釋】時邁其邦、邁は行なり、周の制十二年にして王一たび諸侯の邦を巡視す。『通解』曰く、武王の在位を考ふるに方に五年に及ぶ、朱傳に十二年と云ふは何ぞ、蓋し此の詩武王巡守の作と雖も、後王の巡守因て皆用ふ。故に朱子周家一代の典、周禮秋官大行人に見る者此の如きを擧るのみ、其の實に此の詩を說く者、只武王巡守の初に在て說くべし。然らば諸侯の邦に邁て何を爲す、乃ち山川河海を祭り、兼て以て其の民風を視るなり。昊天其子之、王民を親愛して子の如く爲すの德あり、天は王を親愛して之を子の如くせんとなり。華谷曰く、天下を有を天子と曰ふ、子レ之とは其をして王たらしむるを謂ふ。實右序有周、右の本義は「ミギ」轉義は尊「タットシ」知るべし右は尊にして、左は卑なるを。天下臣民の上に統置するを右と云ふ、序は次序、天の曆數として有周に王たらしむるなり、周は上の虞夏商に序づるものとす。薄言震之、薄は發語の辭、震は動なり、天威を以て天下を動かすなり。莫不震疊、疊は懼、天下懼れざるは莫きなり、疊字古は疊に作る。揚子雲曰く、古の理官罪を決する三日にして其の宜しきを得、乃ち之を行ふ、王莽三日を嫌ふこと盛ん、改めて三田と爲す、今訓して懼と爲すは罪既に定るときは將に刑を施さんとす、故に恐懼の義あり、有邦の諸侯、王の震動に因て各の恐懼を懷くを言ふ。懷柔百神、及河喬嶽、以上八字は二句一讀法とす、諸侯を懼しむるのみならず、山川河嶽の神類を盡な懷柔するなり、懷は招致して己に就かしむる義、柔は和順にして相拂らざるの義、百神の中には





怪神も惡神も善神も盡在るなり。允は信。王は武王。后は君、此の如きは卽ち是れ允に君主たるの德威あり。明昭有周、式序在位、有周の有周たる所以を明昭にすれば諸侯民臣皆疑はず、王の位に在る、乃ち天の有周を右び序づるに對ふる所以なり、載戢干戈、載櫜弓矢、干戈弓矢は悉く戰鬪の具、之を戢め、之を櫜にするは、兵を復用ひざるの謂なり、武を偃め文を修するなり。震動せしめたるの效是に於て乎見る。我求懿德、肆子時夏、我は詩人武王に代りて稱する語、懿は美なり、武王が美德あるの士を求めて以て之を任用し、之を中國卽ち夏に陳ねんとなり。『箋』曰く樂歌の大なるものを夏と稱す。今朱子の中國を取て『箋』の說を取らず。允王保之、王能く天命を受て之を保つなり、時邁は一章十五句。王が巡守して告祭の詩なること文字明白なり。『春秋傳』に昔武王商に克て頌を作る曰く、載戢干戈と、而して外傳又以て周の文王の頌と爲す、則ち此の詩、乃ち武王の世、周公の作る所。

執競武王　無競維烈　不顯成康　上帝是皇　自彼成康　奄有四方　斤斤其明

鐘鼓喤喤　磬筦將將　降福穰穰　降福簡簡　威儀反反　既醉既飽　福祿來反

競きを執る武王、競き無けんや維烈、顯かならずや成康、上帝是れ皇とせり、彼の成康より、奄に四方を有てり、斤斤其れ明かなり、鐘鼓喤喤たり、磬筦將將たり、福を降すこと穰穰たり、福を降す

こと簡簡たり、威儀反反たり、既に醉ひ既に飽き、福祿來り反る、

【句釋】執競武王、無競維烈、『韓詩』に執は服なりとあり、服は持服、競を以て本領と爲すなり、是を以て其の烈たる固よりなり。不顯成康、成王と康王とが武王の競に繼ぎ其の烈亦顯かなり。上帝是皇、天下に皇たるは上帝の命ずる所なり。自彼成康、奄有四方、斤斤其明、武王は草莽を開くの君、成康の二王は其の後を承け其の業を成就したるなり、斤斤は明察の形容語。喤喤は鐘鼓の和聲。將將は磬筦の響集る形容語、磬は石製の樂器、筦は和訓「クダ」竹製の樂器。穰穰は衆多の義。簡簡は衆大の義。反反は謹重の義。既醉既飽、福祿來反、祭事已に終ふ、是に於て飲で醉ひ、食うて飽き、十分に懽樂する是れ皆天の降す福祿たり、反覆して厭はざる所以なり。此の章も『毛傳』は武王一人の事とす、成王と康王とは預からず。今朱子說を取る。執競は一章十四句。

思文后稷　克配彼天　立我烝民　莫匪爾極　貽我來牟　帝命率育　無此疆爾界　陳常于時夏

思文なる后稷、克く彼の天に配せり、我が烝民に立せしむ、爾の極れるに匪ざる莫し、我に來牟を貽る、帝命じて率育せしむ、此の疆爾の界無く、常を時夏に陳ぬ、





【句釋】思は語助にて意義なし、文德なる后稷と喚び出す句なり、郊に於て后稷を天に配して祭る時の樂歌なり。立我烝民、『箋』曰く、立は當に粒に作るべし、烝は衆なり、后稷百穀を播殖して烝民乃ち粒食するの法を知りしなり。莫匪爾極、『傳』に極は中と、朱子曰く、極は至なり。『箋』曰く、天下の人女の時に於て其の中を得ざる者ならざるは無きなり。至極も中も大なる相違なし。貽我來牟、貽は遺貽、來は小麥、牟は大麥。帝命率育、率は用なり、上帝后稷に命じて大小二麥を養殖し諸民を生育せしむ。無此疆爾界、陳常于時夏、遠近彼此の疆界を設けず、天下の民をして盡く其の常道あるを陳しむ。嚴粲曰く、后稷民に稼穡を敎ふ、但養ふのみ、未だ之を敎ふるに及ばず、舜契に命じて敬して五敎を敷き、寬に在れと云ふ如くば之を敎ふるは乃ち契の事なり、思文の詩は后稷を推算す、乃ち常を時夏に陳るを以て言ふは、蓋し常產無うして常心あるものは唯士能くすることを爲す、民の若きは常產無ければ因て常心無く、放僻邪侈爲さざるは無ければなり。

【評論】思文は一章八句。黃氏曰く、生民は述事の辭、思文は告神の辭、此れ雅頌の異なる所以か。孔氏曰く、后稷の南郊に配するは文王の明堂に配すると其の義一なり。

清廟の什十篇十章九十五句。

## 周頌臣工の什四の二

嗟嗟臣工　敬爾在公　王釐爾成　來咨來茹　嗟嗟保介　維莫之春　亦又何求
如何新畬　於皇來牟　將受厥明　明昭上帝　迄用康年　命我衆人　庤乃錢鎛
奄觀銍艾

嗟嗟臣工、敬しめ爾の公に在るを、王爾に成を釐ふ、來り咨ひ來り茹れ、嗟嗟保介、維莫の春、亦又何をか求めん、新畬を如何せん、於皇來牟、將に厥の明を受けんとす、明昭なり上帝、康年を用ふるに迄らん、我が衆人に命じて、乃の錢鎛を庤へしむ、奄ち銍艾を觀ん、

【句釋】嗟嗟は『傳』に勑之なりと。朱子曰く、重嘆して以て深く之を敕むるなり。臣工は臣侯なり、羣卿百官を指す。敬爾在公、爾等が躬は我が公事に在るを敬めよ、公事は卽ち王家を指す、私事私家に非ざるなり。釐は賜。成は一定の成法。咨は問。茹は度なり、農官は農官の守るべき法あり、然るに私意に任せて之を爲す勿れと戒勑するなり。保介は『箋』に車右也とあり、農官の副たる官人なり。維莫之春、莫は暮の正字、莫春は三月の莫、孟春（周ノ莫春ハ夏ノ孟春ナリ）に天子親から耒耜を載せ、之を參保介の御間に措く。亦又何求、如何新畬、保介よ爾等、莫春に當り何をか民に求めんとするや、將に彼の新畬卽ち





開拓して三年に滿たざる田を如何にせんとするや、王が意、農を敎へ時に趨くを急にするなり。於皇は嘆美の詞。來牟、將受厥明、是の時に當り朕は將に其の秀熟する來牟を受けんとす、是れ亦天の錫ふ所なり。明昭上帝、迄用康年、康年は豐年と同じ、我が周家大に其の光明を受く、謂て珍瑞と爲す、天下休慶とする所、此の瑞乃ち天に見はる、今に至り之を用ひて樂歲あるなり。命我衆人、其の畿甸內の農民に命を下す。庤は具なり。錢は「スキ」。鎛は小鍬。銍は短鎌なり。艾は穫なり。管子曰く、一農の事、必ず一銍、一耨、一銚あり、然して後農を成す、此の三器は耕耘刈の三用を爲す、一を闕けば不可と。上代の農器の簡見るべきのみ。

【評論】臣工は一章十五句。先輩云ふ此の篇は祭祀の樂歌にあらずして頌に入る、體蓋し頌なるに由るか。或は然らん。

噫嘻成王　既昭假爾　率時農夫　播厥百穀　駿發爾私　終三十里　亦服爾畊
十千維耦

噫嘻成王、既に昭かに爾を假せり、時の農夫を率ゐて、厥の百穀を播く、駿に爾の私を發し、三十里を終へ、亦爾の畊を服とし、十千維耦せよ、

【句釋】噫嘻も亦嘆詞。成王は『毛傳』は王事を成すと解す。朱子は成王其の人と稱す。今朱說を取る。成王が既昭假爾せるなり。假は至、爾は農官を指す、成王の世始めて田官を置き、之に戒命す、後王復其の法に遵つて以て戒命する。率時農夫、播厥百穀、田吏農夫を使役して、田田に穀物を播施せしむ。駿は大。發は畊。爾私、爾の私田。終三十里、三十里と限るは人目の望見極まる所を謂ふ。亦服爾畊、服は服事、爾の畊に服事して餘念無きなり。十千維耦、十千と限るは人力の用得して極まる所を謂ふ、耦は二人を言ふ、萬人が力を合せて一耦の如くするの謂ひなり、噫嘻は一章八句、樂歌にあらざること臣工の章と同じ、穀を上帝に祈る詩。

振鷺于飛　于彼西雝　我客戾止　亦有斯容　在彼無惡　在此無斁　庶幾夙夜
以永終譽

振鷺于に飛ぶ、彼の西雝に、我が客戾止、亦斯の容あり、彼に在りては惡まるる無く、此に在りては斁はるる無し、庶幾はくは夙夜、以て永く譽を終へん、

【句釋】振は鷺の羣飛する貌。西雝は西澤、雝は本來水鳥の名、「ニハタタキ」と稱す、今澤の義を取る。我客戾止、『傳』曰く、客は二王の後。朱子曰く、夏の後は杞、商の後は宋、周は公爵を以て之を封じ、





各の其の先王の禮樂を守らしむ、周に於ては客禮を以て之を遇す。戾は至、周の祭事を助けん爲め至る。亦有斯容、亦は鷺の字に亦す、客も亦鷺の如く絜白なる容あり、鷺の立つや威儀の正しきを喩ふること勿論なり。在彼無惡、在此無斁、彼は其の住國、此は今戾る所の周朝、彼に在ても之を怨惡するもの無く、此に在ても之を厭嫌するもの無し。庶幾夙夜、以永終譽、之を幸とするが庶幾なり、循環窮り無きが夙夜なり、庶幾はくは其の美譽を終へて汝の天命を全うせんとなり、來りて祭を助くる者の詩。振鷺は一章八句。

豐年　多黍多稌　亦有高廩　萬億及秭　爲酒爲醴　烝畀祖妣　以洽百禮　降福孔皆

豐年にして黍多く稌多く、亦高廩あり、萬億及び秭、酒を爲り醴を爲る、祖妣に烝め畀へ、以て百禮を洽ふ、福を降すこと孔だ皆し、

【句釋】稌は『傳』に稻なり。李氏曰く、稌は糯なり。『職方氏』曰く、雒冀は高燥にして其の穀黍に宜し、荆揚は下濕にして其の穀稻に宜し。廩は米を畜積せる倉庫を言ふ。萬の上を億と言ふ。億の上を秭と言ふ。醴は前に辨せり。烝は進なり。畀は予なり。祖妣は先祖と先妣となり。以洽百禮、降福孔皆、

豐年收入多し、以て祭祀に供し、百禮を備ふべし、而して神降の福益す多からん、皆は徧なり。豐年は一章七句。

有瞽有瞽　在周之庭　設業設虡　崇牙樹羽　應田縣鼓　鞉磬柷圉　旣備乃奏
簫管備舉　喤喤厥聲　肅雝和鳴　先祖是聽　我客戾止　永觀厥成

瞽あり瞽あり、周の庭に在り、業を設け虡を設け、崇牙羽を樹つ、應田縣鼓、鞉磬柷圉、旣に備りて乃ち奏し、簫管備はり舉ぐ、喤喤厥の聲、肅雝にして和鳴、先祖是れ聽く、我が客戾止、永く厥の成を觀る、

【句釋】瞽は矇なり、無目の人、目見る所無く音聲に於て審なり、周禮に上瞽四十人、中瞽百人、下瞽百六十人。濮氏曰く、王者功成り樂を作り、始めて祖廟に合奏す、此れ工歌なり、乃ち瞽人は樂官なり。周庭は周の廟庭にて周の宮庭にはあらず。業と虡とは嚮きに靈臺篇の下に辨せり。羽は羽旗、崇牙の上に樹つ。應は小鞞。田は大鼓。縣鼓は周鼓、縣は懸の正字、周鼓は夏商の制と異なりて簨虡に縣るものなり。鞉は劉熙云ふ導なり、樂作を導く所以。鼓は擊て播はず、鼗は播て擊たず、柷は狀漆桶に似て中心虛なり、聲の出る所、虛を以て本と爲す、振り鳴らすもの。圉は柷と反對にして中心實り、聲の止まる所、則ち實に歸す、形伏虎の如くにして聲伏す、故に又之を椌と言ふ、樂を止むる時用ふるもの、以





上總て七箇の樂器を擧ぐ。簫管は前に屢ば辨あり、堂上と堂下と吹奏相合して祭を爲す、喤喤以下數文字、前に辨あり、此の如き廟祭、先祖の神も聽き、我が來賓も共に聞き、永く我が功の成れるを觀ん。

【評論】有瞽は一章十三句を以て成る。周公攝政六年、禮を制し樂を作り、一代の樂功成りて諸樂器を大祖の廟に合し、之を奏し神に告ぐ、詩人其の事を述べて此の歌を爲る。

猗與漆沮　潛有多魚　有鱣有鮪　鰷鱨鰋鯉　以享以祀　以介景福

猗與漆沮、潛んで多魚あり、鱣あり鮪あり、鰷鱨鰋鯉あり、以て享り以て祀る、以て景福を介にす、

【句釋】猗與は『箋』曰く嘆美の言と。潛は『傳』曰く槮なり。黃氏『讀詩鑫測』曰く潛は深處なり、毛氏訓して槮と作すときは是れ柴を積で以て魚を養ふなり、知らず漆沮の中如何ぞ柴を積で以て之を養はん、江海魚多し、豈皆柴を積で以て之を養はんや。余謂ふに漆水と沮水の中には種種の魚族に富むとの意ならん。養魚の業を人が爲すと言ふにはあらざるべし。鱣は和訓「オホシビ」大鯉。鮪は和訓「シビ」。鰷は和訓「セイゴ」。鱨は和訓「キギ」。鰋は和訓「ナマヅ」。鯉は和訓「コヒ」なり。以享以下の說明前にあり。潛は一章六句。宗廟に薦むる魚族の頗る豐富なるを言はん爲めなり。

有來雝雝　至止肅肅　相維辟公　天子穆穆　於薦廣牡　相予肆祀　假哉皇考
綏予孝子　宣哲維人　文武維后　燕及皇天　克昌厥後　綏我眉壽　介以繁祉
既右烈考　亦右文母

來るありて雝雝たり、至止肅肅たり、相くるは維辟公、天子は穆穆たり、於廣牡を薦め、予を相けて祀を肆ぬ、假哉皇考、予孝子を綏んぜん、宣哲なるは維人、文武なるは維后、燕んじて皇天に及ぶ、克く厥の後を昌にせり、我を眉壽に綏んじ、介くるに繁祉を以てし、既に烈考を右び、亦文母を右ばしむ、

【句釋】有來、至止、諸侯が周の廟庭に來るあり至るあるなり。雝雝は和なり。肅肅は敬なり。相は助、諸侯が和して來り敬して祭るは皆天子の禘祭を助けんが爲めなり、武王が文王を祭るに就てなり。穆穆は天子の風采を言ふ。廣牡は『箋』曰く大牡の牲を進むるなり、諸侯が祭具として碩大の肥腯を獻上するなり。相予、予は詩人武王に代りて言ふ、武王を相けて祀を肆ぬるなり。假哉は大哉と同じ。皇考は文王を指す。綏予孝子、武王自から稱して孝子と言ふ、辟公に對して言ふときは天子、皇考に對して言ふときは孝子なり、皇考も孝子の奉祀の心を綏んじ承け玉はんとなり。宣哲、宣は事に通ずるなり。哲は理に通ずるなり。維人、事理に精通するは卽ち是れ人の道なり。文武維后、文王は實に文德と武威とを兼備し、而して事理に明哲なる人なりしなり。燕及皇天、人を燕じ兼て以て德天に及ぶなり。克昌厥





後、始あり又終あるは達人の事、文王は實に始あるのみならず、其の後嗣までも昌んならしめ玉へり、文王名は昌、後世は其の名を避けて用ひざるを法とす、然るに當時關せざること知るべし。綏我眉壽、其の子孫たる我を綏んず、介以繁祉、介は大、繁は多、祉は福、子孫に大多福を賜ふ。既右烈考、烈考は皇考と同じ。『傳』に武王と曰ふは非、文王なり。文母は卽ち文德の母、大姒なり、我をして烈考文母を右ぶを得しむるは直ちに是れ其の恩德なりとなり。

【評論】雝は一章十六句を以て成る。『古義』曰く、大祭祀利成を告るの後、徹するに必ず雍を歌ふ、古の祭祀樂ありて以て來を迎へ、必ず樂ありて以て食を徹す。黃佐曰く、此の詩但武王、文王を祭りて俎を徹するの詩と爲す、而して後來他廟に通用するのみ。

載見辟王　曰求厥章　龍旂陽陽　和鈴央央　鞗革有鶬　休有烈光　率見昭考
以孝以享　以介眉壽　永言保之　思皇多祜　烈文辟公　綏以多福　俾緝熙於
純嘏

載めて辟王に見え、曰に厥の章を求む、龍旂陽陽たり、和鈴央央たり、鞗革鶬あり、休として烈光あり、率ゐて昭考に見ゆ、以て孝し以て享す、以て眉壽を介く、永く言に之を保てり、皇の多祜を思ひ、烈文

なる辟公、綏んずるに多福を以てす、純嘏を緝熙ならしむ、

【句釋】載は『傳』に始とあり。朱子則と訓す、今用ひず。諸侯が武王の祭を助くる時の詩。辟王は君王なり。曰求厥章、『箋』曰く、車服禮儀の文章制度を求むるなり。龍旂、旂の紋に交龍を畫く。陽陽は明の貌。和鈴、和は軾前に在る「スズ」、鈴は旂上に在る「スズ」なり。央央は鳴聲の形容。鞗革は轡の首に付けたる金厄。鴥は和名「マナヅル」鳥の名。故に『箋』は金飾の貌と言ふ。朱子は聲の和なりと言ふ。今『箋』に依る。休は『箋』に休然盛壯と。有烈光、諸侯の車服壯美にして烈光あるを言ふ。昭考は武王を指す。『通釋』曰く、后稷始封の君たり、其の廟中に居し、二世を昭と爲し、三世を穆と爲し、數へて十五世に至る、而して文王の廟次で穆に當る。十六世にして武王の廟次で昭に當る。以孝以享、廟に入て孝敬し享獻するなり。思皇多祜、思は朱子は語助「ソレ」と言ふ。『箋』曰く、諸侯が成王を多福ならしめんと思ふなり。今『箋』に依る。俾緝熙於純嘏、烈文なる辟公、我が祭を助けて以て之を致し、我をして純福に至らしむ。純嘏は卽ち多祜と同じ、文を變じて章を成すのみ。我を助くる意を主とするが故に功德を諸侯に歸せしむる意見るべし。載見は一章十四句、諸侯始めて武王の廟に謁見せるを敍せる詩なり。





有客有客　亦白其馬　有萋有萁　敦琢其旅　有客宿宿　有客信信　言授之縶
以縶其馬　薄言追之　左右綏之　既有淫威　降福孔夷

客あり客あり、亦其の馬を白うせり、萋たることあり萁たることあり、其の旅を敦琢す、客あり宿宿し、客あり信信す、言に之に縶を授け、以て其の馬を縶がしむ、薄らく言に之を追ひ、左右に之を綏んせん、既に淫威あり、福を降すこと孔だ夷し、

【句釋】有客有客、成王既に殷命を黜け武庚を殺す、微子に命じて殷の後に代らしむ、既に命を受け來朝す、此の詩乃ち是れなり、客は卽ち微子なり、微子は商紂の庶兄、商の亡びんとするを見て周に歸す、周は商を滅ぼし微子を宋に封じ、以て其の先王を祀らしめ、遇するに客禮を以てして敢て之を臣とせず、微子の賢亦克く德を守る。亦白其馬、商は白馬を尙ぶ、是を以て其の舊に從はしむ。萋と萁とは『傳』に敬愼の貌。『箋』曰く、威儀萋萋萁萁と。或は然らん。敦琢は『箋』曰く選擇なり。其旅は微子に隨從せる卿大夫を指して言ふ、琢を以て擇の義に取るは之を美むる故と言ふ。宿宿は再宿。信信は四宿なり。有客を重用す、之を喜ぶ意。言授之縶、縶は絆。以縶其馬、周の君臣、皆微子を愛して之を留めしむ、殷勤の意見るべし。薄言追之、左右綏之、『箋』曰く、追は送なり、微子去るに於て王始めて之を餞送せんと言ひ、左右の臣又從つて之を安樂せんと欲して已むこと無きなり。既有淫威、降福孔夷、『傳』曰く、

淫は大、威は則、夷は易。『箋』曰く、既に大則あり、殷の正朔を用ひ其の禮樂を行ひ天子の如くなるを言ふ、神之に福を與ふ又甚だ易し、動作して度あるを言ふ。有客は一章十二句。

於皇武王　無競維烈　允文文王　克開厥後　嗣武受之　勝殷遏劉　耆定爾功

於皇なる武王、競ふること無きは維烈、允に文なる文王、克く厥の後を開く、嗣いで武之を受けたり、殷に勝つて劉すことを遏め、爾の功を耆し定めたり、

【句釋】於は嘆辭。皇は大。烈は業。嗣武は『傳』に迹を嗣ぐと解す。今用ひず。武は迹にあらず武王を言ふなり。武王が文王の業を受け、兵を擧げ殷を伐て之に勝ち、以て天下の暴虐人を殺す者を遏め、以て其の功を致し定む、紂を誅するに汲汲たらず須暇五年なるを言ふ。武一章七句。三山の李氏曰く、大武の意、戈を止むるに在り、大武の詩、殺を止むるに在り。

臣工の什十篇十章一百六句。





## 周頌閔予小子の什四の三

閔予小子　遭家不造　嬛嬛在疚　於乎皇考　永世克孝　念茲皇祖　陟降庭止

維予小子　夙夜敬止　於乎皇王　繼序思不忘

閔ましいかな予小子、家の造らざるに遭ひ、嬛嬛として疚ましきに在り、於乎皇考、永世に克く孝あり、茲の皇祖を念ふ、陟降庭かりき、維予小子、夙夜に敬む、於乎皇王、序を繼がんこと思うて忘れず、

【句釋】閔は病。予小子は成王の自稱。遭家不造、國家として造すべきこと猶ほ有るに而かも未だ造らざる時に遭ふと嘆ず。嬛嬛は煢煢と同じ、依怙する所無きの意。疚は憂病、俗語の心配甚だしきを言ふ。於乎皇考、武王を言ふ。永世克孝、我が父王の武王は文王に對して終身孝を竭くせり。念茲皇祖、成王より言へば文王は祖に當る。陟降庭止、『傳』に庭は直なりと。朱子は堂庭と解す。皇祖が堂庭に陟降するを眼前に見る如しと念ふが朱說。皇祖が陟るにも降るにも直しかりしと念ふが毛公の說。今毛說を取る。皇王は文王武王を合して言ふ。繼序思不忘、我の夙夜敬する所以は皇祖の功業の序に繼ぎて其の德を墜さざらんことを思うて忘れざるなり。成王は文王よりすれば周の三世なれど、武王を一世とすれば第二世なり、國家として諸般の施設を要すること洵とに多からん、此の至切至哀の詩ある所以なり。閔

予小子は一章十一句。朱子曰く、成王喪を除き廟に朝して作る所、疑ふらくは後世遂に以て嗣王廟に朝するの樂と爲るならん、後の三篇此に倣へ。

訪予落止　率時昭考　於乎悠哉　朕未有艾　將予就之　繼猶判渙　維予小子
未堪家多難　紹庭上下　陟降厥家　休矣皇考　以保明其身

【句釋】訪予落止、率時昭考、訪は問、落は始、成王が卽位の始に於て羣臣に政を問ふなり、而して朕は昭考武王の道に率はんとなり。悠哉は悠遠なり。未有艾、艾は及、昭皇の道には朕未だ及ばずとなり。將予就之、及ばざるも予は之に就かんと欲する念あり。繼猶判渙、『傳』曰く、判は分、渙は散、昭皇に繼ぐも朕が力足らずして物を結合する能はずとなり。未堪家多難、國家多難にして、朕之を統理するに堪へずとなり。紹庭上下、陟降厥家、上下と言ひ陟降と言ひ、共に昭皇の日常動作に倣はんと也。休矣皇考、以保明其身、休は『箋』に美と訓す。休美なる皇考の能く此の道を以て其の身を尊安し、天





下を定め天子の位に居るを謂ふ。

【評論】訪落は一章十二句。張叔翹曰く、落を以て始と爲し、亂を以て治と爲し、臭を以て香と爲し、特を以て匹と爲すの例、古人語此の如くなること多し。李三山曰く、人君は天下の本なり、始めて位に卽き政に臨むは又人君の本なり、故に伊尹太甲に告るに嗣王新たに厥の命に服す、惟厥の德を新にせよと云ふを以てす、召公亦王初服に反れと曰ふ、此れ訪落の由て作らるる所なり。

敬之敬之　天維顯思　命不易哉　無曰高高在上　陟降厥土　日監在玆　維予小子
不聰敬止　日就月將　學有緝熙于光明　佛時仔肩　示我顯德行

【句釋】敬之敬之、『序』に此の章は羣臣戒を嗣王に進るなりと。敬は天を敬するなり、天を敬するは卽ち身を敬むなり。天維顯思、思字意義なし、天は光明曾て暗きこと無し。命不易哉、『箋』曰く、其の命吉凶變易せざるなり。朱子曰く、其の命保ち易からざるなり。朱說を可とす。無曰高高在上、天は高

うして我と近からずと曰ふこと無かれ。陟降厥士、日監在玆、天は自由に其の事を上下し、日月を轉運し、其の行ふ所を施し、日日瞻視して近く此に在るなり。小子は嗣王なり。不聰敬止、聰明ならざるも敬すべきは敬すとなり、止字意義なし。日就月將、之を習うて以て積漸するを言ふ。學有緝熙于光明、『箋』曰く、光明あるの光明なる者に學ばんと欲するなり、賢中の賢なるを言ふ。佛は弼と同じ、輔弼なり。仔肩は任なり、負荷する所の任を輔弼せよと羣臣に言ふの詞なり。示我顯德行、我は王の自謂、我を指道するに顯明の德行を以てせよとなり。

【評論】敬之は一章十二句。前六句は羣臣の言、後六句は王の羣臣に答ふる言、詞義頗る明白、疑闇の處なし。

予其懲　而毖後患」　莫予荓蜂　自求辛螫」　肇允彼桃蟲」　拚飛維鳥　未堪家多難」
予又集于蓼」

予其れ懲りて、後患を毖まん、予蜂を荓ひて、自から辛螫を求むること莫からんや、肇め彼の桃蟲を允とし、拚として飛ぶ維鳥なり、未だ家の多難に堪へず、予又蓼に集めり、

【句釋】予は成王。懲は戒と止と畏との三義を含む、其の非を改悔するの言なり。毖は慎なり。後患、





後に禍難あることを戒慎する。莫予荓蜂、自求辛螫、荓の本義は馬帚、使と訓す。蜂は元來人を螫す蟲なり、此の蜂を使役するは害ありて益なきを言ふ。辛は「カラク」人を螫すの酷なるを言ふ。肇は始。允は信。桃蟲は鷦鷯の異名、和名「ミソサザイ」なり。此の鳥は小鳥なれど化して鵰と爲る。拚は飛狀を形容す。飛維鳥、飛翔するに至れば大鳥と爲り害を爲す。未堪家多難、王方に幼沖にして周家の多難に堪へず。又集于蓼、蓼は辛苦き物、集は會なり、惡人共が集會するを蓼に托して之を言ふ。

【評論】小毖は一章八句。桃蟲、蜂、蓼等は武庚及び管叔に喩ふ、武王始め殷を征し、紂の子武庚を殷に封じ、管叔をして之を監せしむ、然るに成王の世に至り管叔、武庚を以て叛し亂を作す、成王之を平らぐと雖も、此の詩は未だ平らげざる前に作る所なり、忠臣の出でて以て予を助けざらんやとの意を以て寓す。

載芟載柞　其耕澤澤　千耦其耘　徂隰徂畛　侯主侯伯　侯亞侯旅　侯彊侯以
有喻其饁　思媚其婦」　有依其士　有略其耜　俶載南畝」　播厥百穀」　實函斯活
驛驛其達　有厭其傑　厭厭其苗　綿綿其麃　載穫濟濟　有實其積　萬億及秭
爲酒爲醴　烝畀祖妣」　以洽百禮」　有飶其香　邦家之光　有椒其馨　胡考之寧

匪且有且　匪今斯今　振古如茲

載ち芟ぎり載ち柞り、其の耕こと澤澤たり、千耦其れ耘り、隰に徂き畛に徂く、侯主侯伯、侯亞侯旅、侯彊け侯以ひ、喰たるあり其の饁、思れ其の婦を媚む、依しむあり其の士、略きあり其の耜、俶めて南畝に載す、厥の百穀を播す、實函んで斯活く、驛驛たり其の達、厭たるあり其の傑、厭厭たり其の苗、緜緜たり其の麃、載ち穫りて濟濟たり、實るあり其れ積め り、萬億及び秭、酒を爲り醴を爲り、祖妣に烝め畀へ、以て百禮を洽ふ、飶たるあり其の香、邦家の光、椒たるあり其の馨、胡考の寧きなり、且に且あるにあらず、今の斯今なるにあらず、振古より茲の如し、

【句釋】載芟載柞、草を除くを芟、木を除くを柞と言ふ、秋官の柞氏草木を攻むることを掌る。澤澤、凍釋け土膏融すれば其の土澤澤然として解け散るなり。千耦其耘、多勢の農夫が出て以て耕耘するを言ふ、草木の芟り殘せる根株を又掃除するなどと解するは無用の事なり。徂は往。隰は原隰と熟語す、上の平が原、下の平が隰なり。畛は田の「クロ」卽ち田中の高き處なり。主は家の主人、伯は長兄。亞は二子。旅は諸弟を指す。彊は助。四鄰餘力ある者來りて農事を助くるなり。以は主人が能く此等の人を左右して自由に引ゐるなり。喰は衆の食ふ貌。饁は饋饟なり。媚其婦、有依其士、士は夫なり、夫婦が田野に於て食を取り、互に相愛美して其の勞を慰さむるを言ふ。有略は有利なり、利き耜を以て、俶載





南畝、南畝より熾蓄して以て東西に及ばんとするなり。播は播施、百穀の種を播施す。實函、其の實皆能く生氣を含んで活るなり。驛驛は苗の生ずる貌。達は苗の地より出る貌。厭は厭然、傑は他の苗に勝れて特出する。厭厭其苗は多くの苗齊等なるを言ふ。緜緜は芸して息ざる貌。麃は耘なり。畊し及ぼさざる所無きなり。濟濟は『傳』に難なり。『箋』曰く、難は穗衆く進がたきなり。朱子曰く、人の衆き貌。朱說從ふ可し。有實其積、其の收穫の多くありて之を積んで充實せるを言ふ。萬億及秭、此の解前に在り。爲酒、以下の解も亦前に在り。有飶、飶は『傳』に芬香とあり、酒醴の香氣を指す。邦家之光、酒醴以て老者に供するを得るは、畢竟夫婦長幼の別無く、和して以て勤勞したる結果なり、然らば則ち邦家の光ならずして何ぞ。有椒、椒は飶と同意味なり、元來木の名、香氣にはあらず、然れども是の木は香木なり故に以て香氣と爲す。馨は馨香。胡考之寧、『傳』に胡は壽、考は成、壽成りて安寧なり、酒醴を以て老者に供し、其の老を養うて以て安寧ならしむるを言ふ。匪且有且、『傳』に且は此なりと、獨此の處のみ此の稼穡の事あるにあらず。匪今斯今、獨今の時此の豐年の慶あるにあらず。振古如茲、振も亦古なり、蓋し極めて古より此の如くなり。

【評論】載芟は一章三十一句。朱子曰く、此の詩未だ用ふる所を詳かにせず、然れども辭意豐年と相似たり、其の用亦應に殊ならざるべし。『序』曰く載芟は春籍田して社稷を祈るなり。

翌翌良耜　俶載南畝　播厥百穀　實函斯活　或來瞻女　載筐及筥　其饟伊黍
其笠伊糾　其鎛斯趙　以薅茶蓼　茶蓼朽止　黍稷茂止　穫之挃挃　積之栗栗
其崇如墉　其比如櫛　以開百室　百室盈止　婦子寧止　殺時犉牡　有捄其角
以似以續　續古之人

翌翌たる良耜、俶めて南畝に載す、厥の百穀を播く、實函んで斯れ活きたり、來る或り女を瞻れば、載ち筐及び筥、其の饟は伊黍、其の笠伊糾り、其の鎛斯趙し、以て茶蓼を薅へり、茶蓼朽止、黍稷茂止ぬ、之を穫ると挃挃たり、之を積むこと栗栗たり、其の崇きこと墉の如く、其の比べると櫛の如し、以て百室を開けり、百室盈止、婦子寧止、時の犉牡を殺す、捄れる其の角あり、以て似ぎ以て續ぎ、古の人に續ぐ、

【句釋】翌翌は嚴整にして銛利なる良耜なり、俶載以下十二字前と同じ、或來瞻女、妻子の來りて餉する者を瞻る。筐は方なる筐。筥は圓なる筥、筐は蠶に用ひ、筥は穀に用ふ。其饟伊黍、俗に言ふ辨當箱は何を入れてあるや卽ち黍の食なり。糾は糾然、笠の輕く擧るなり。鎛は鋤の類。趙は地を刺すなり。薅は音「カウ」、訓「ハラフ」なり。茶蓼の如き穢草を除去するなり。茶蓼朽止、黍稷茂止、朱子曰く、





毒草朽るときは土熱して苗盛んなり。挃挃『傳』に稻を穫る聲と。栗栗は積むことの衆多なり。崇は高、穫積んで高きこと墉の如きなり。其比如櫛、以開百室、周禮に五家を比と爲し、五比を閭と爲し、四閭を族と爲す、百室は卽ち一族の謂なり、一族の人互に相助けて以て同時に穀を入るるなり。百室盈止、婦子寧止、盈は滿盈、寧は安寧、豐年にて一族妻子皆樂しむなり。殺時犉牡、豐年にて祖先を祭るなり、犉は黃牛にして脣の黑きなり、牡は牝に比すれば其の角甚だ捄れり。以似以續、續古之人、前前より此の禮祭を爲し而して後後に續く、後の人は卽ち前人の事を續ぐなり。

【評論】良耜は一章二十三句。序に秋社穫に報ずるなり、農人至樂の狀、一一の文字言ひ得て分明なり。

絲衣其紑　載弁俅俅　自堂徂基　自羊徂牛　鼐鼎及鼒　兕觥其觩　旨酒思柔
不吓吳不敖　胡考之休

絲衣其れ紑たり、弁を載くこと俅俅たり、堂より基に徂き、羊より牛に徂く、鼐鼎及び鼒、兕觥其れ觩れり、旨酒柔を思ふ、吳ならず敖ならず、胡考之れ休せん、

【句釋】絲衣其紑、絲衣は『傳』に祭服なりと。玄き色、纁き裳、皆絲にて之を爲る、士が王の繹祭を助くる時服するなり。紑は絜鮮の貌。載弁、弁音「ベン」訓「カンムリ」冠なり、爵弁は其の色赤うし

て微しく黒く脣頭の如く然り。俅俅は『傳』に恭順の貌とあり。自堂徂基、門側の堂之を塾と言ふ、門を夾むの堂なり。必ず塾ある所以は門を飾らんと欲するなり、臣君に見ゆるに當りて、必ず其の事を熟思するを明かす、是の塾は門の堂と爲す、基は門塾の基、廟門の外、西夾の堂基を言ふ、乃ち堂より下り、基に徂き濯ひ具はれるを主人に告ぐ。禮器の已に濯ひ終れることを告すなり。自羊徂牛、次ぎに門外の牲を見て羊より牛に徂き、反りて其の充肥なる牲なることを告ぐ。鼐は鼎の大なる物。鼎は三足兩耳にして五味を和するの寶器。鼐は鼎の小なる物、此の鼎の類皆門外に在るなり。兕は角なり。觥は酒器、卽ち「サカヅキ」なり。觩は曲、杯を角の形狀の儘にて製す、是を以て觩るなり。旨酒思柔、美酒が頗る和柔なり、祖先の祭に主人胙を受くる後、賓客と共に酒を飲み以て樂しむ。不吳不敖、『箋』に讙譁せず、敖慢せざるなりと。胡考之休、祖を祭り禮を具ふること前の如くなるときは壽考の休福を受くべしとなり。

【評論】絲衣は一章九句、『序』に繹(繹ハ祭ノ名)に尸を賓するなり。今曰く、靈星を祭る時、人を以て尸と爲す、靈星猶尸あり、宗廟の祭尸あること必せり。

於鑠王師　遵養時晦　時純熙矣　是用大介　我龍受之　蹻蹻王之造　載用有嗣





## 實維爾公允師

於鑠なる王師、遵ひ養うて時に晦し、時熙を純にせり、是を用て大に介す、我龍めて之を受く、蹻蹻たる王の造、載ち用て嗣ぐことあり、實に維爾の公允に師なり、

【句釋】於は歎辭。鑠は盛。王師は武王の軍衆。遵養時晦、暗に潛勢力を養うて未だ時に知られざるを言ふ。時純熙矣、是れ潛勢力を養ひし結果、風雲を捲き起す時來れるを言ふ、熙は光を發するなり、殷を破り、周道大に興る時なり。是用大介、介は甲、武王の一たび戎衣して起つや、死を致して之を助けんとする士出るなり。我龍受之、『箋』に龍は寵なりと。來りて我(王)を助くる者、我寵しんで之を受用す。蹻蹻たるの士、皆爭ひ來りて王に造る、王則ち之を用ふ、嗣傳して相致すとあり。『箋』の意は武王の當時を言ふ。朱子曰く、後人是に於て寵しんで此の蹻蹻然たる王者の功を受く、其の之を嗣ぐ所以の者、亦維武王の事を是れ師とするのみ。今曰く、『箋』は我を以て武王と爲すより彼の如き說を爲す、我は此の詩を作る人の稱なるを知らば朱子の說の如くならざるべからず。詩人武王の武功を稱揚して言ひし語なることを信ずべきなり。實維爾公允師、公は事、爾は武王を指す、時に先だつて動かず、時に後れて靡まず、爾の武を用ふること能く是の如し、是れ亦武王なるのみ。

【評論】酌は一章八句。『箋』曰く周公攝に居る六年、禮を制し樂を作る、政を成王に歸す、乃ち後、

廟に祭りて之を奏す、其の始めて成る之を告るのみ。朱子曰く、酌は勺なり、『內則』に十三にして勺を舞ふ、卽ち此の詩を以て節を爲りて舞ふなり。然れども此の詩と賚般の篇と皆詩中の字を用ひて篇に名けず、疑ふらくは樂節の名に取りて武宿夜と曰ふが如けん。何氏曰く勺は籥なり、舞籥は文舞なり。孔氏曰く籥舞は兵器を用ひず、其の幼を尙ぶを以て故に小舞を習ふなり。賈氏曰く詩樂章と爲し、舞人と節を爲す、故に詩を以て舞を爲すなり。『禮記』曰く、舞は武宿夜より重きは莫し、注に武は曲の名、武王商邱に至り停止すること宿夜、士卒皆歡樂歌舞して以て旦を待つ、故に名く。

綏萬邦　屢豐年　天命匪解　桓桓武王　保有厥士　于以四方　克定厥家　於昭于天　皇以閒之

【句釋】綏は安。屢は亟なり、無道を誅し天下を安んじ、亟ば豐熟の年あり陰陽和す。天命匪解、無道を誅し正道を興す、是れ天の武王に命ずる所、然らば則ち我に於て解倦せず、以て孜孜たり。桓桓は武の貌。保有厥士、殷は厥士を保有する能はずして國亡ぶ、厥の士を保有する者は國興る。于以四方、





以は用なり、四方は外なれば武事。克定厥家、天子は天下を以て家と爲す者なり、必ず四方安定にして而して後克く厥の家を定む。於昭于天、皇以閒之、『傳』に閒は代なり。『箋』曰く紂天下の君と爲り、但惡を爲すに由て、天武王を以て之に代ふ、然らば則ち武王の公德は天に昭昭として、其の私事にあらざること知るべきなり。

【評論】桓は一章九句。武王殷の無道を誅せんと欲し、六軍を陣列し、武事を講習す。詩人乃ち此の詩を作り此の事を稱揚す。武王の時に作るにはあらず、成王の世に至りての作なること疑ふべき無し。

## 文王既勤止　我應受之　敷時繹思　我徂維求定　時周之命　於繹思

文王既に勤止、我應じて之を受く、時の繹思を敷き、我徂いて維定らんとを求む、時周の命なり、於繹思、

【句釋】文王既勤止、我應受之、周は武王の興す國なれども、武王の父西伯が或は羑里の苦を忍び、亦克く士を得て其の政を修めたるの勤勞に因る、我卽ち武王は其の後を受けたるのみと、詩人武王に代りて武王の意を言ふ。敷時繹思、敷は徧なり、是の文王の勞心を敷て、能く陳繹して之を思念す。我徂維求定、我殷を征して徂き、此を以て定まらんことを求む、天下を安定するの謂なり。時周之命、於繹思、『箋』曰く、勞心するは、是れ周の天命を受る所以にして、王たるの由る所なり、女諸臣の封を受る

者、陳繹して之を思行せよ、文王の功業を以て勑して之を勸む。

【評論】賚は一章六句、武王の功臣を封賞する、人其の武王の恩たることを知る、武王の心より之を言へば、乃ち是れ文王の功德の、人心に在て思繹すべき者のみ、己が恩にあらざるなり、是を以て往て天下の安定を求むるときは鷹はくは其れ可ならん、然らば則ち其の封を受る者、又以て文王の德を尋繹せずんばあるべからず。詩人武王に代りて言ふと雖も、武王の心事實に此の如きものならん。

於皇時周　陟其高山　隮山喬嶽　允猶翕河　敷天之下　裒時之對　時周之命

於皇なり時の周、其の高山に陟る、隮山喬嶽あり、允に猶つて河を翕はす、敷天の下、時を裒めて之れ對す、時周の命なり、

【句釋】皇は大なり、君、美の解今用ひず、周王の巡狩を頌する詩なり。高山は名詞にあらず、高き山を言ふ。隮山は亦名詞にあらず。山の墮墮として小なる者。喬嶽も亦名詞にあらず。喬は高、嶽の高き者。高山に陟りて之を祭り、隮山や喬嶽は高山より望見する所なり。允猶翕河、『箋』に猶は圖なりと。朱子曰く、猶は由と同じ。今朱說を取る。翕は合なり。朱子曰く、河善く泛溢す、今其の性を得、故に翕て暴を爲さざるなり。『箋』曰く、河は大陸の北より敷て九河と爲る、祭る者合して一と爲るなり。今





『箋』に從うて朱說を取らず。敷天之下、敷は普と同じ。裒は聚。時之對、山川嶽河皆徧く對配して其の神を祭る。時周之命、周の天命を受けて王たる所以なり。

【評論】般は一章七句。武王巡狩して四嶽河海を祭る詩なり。稱して般と曰ふ何の義なるを知らず。或は曰ふ般は游、巡守の事なりと。

閔予小子の什十一篇十一章一百三十七句。

# 魯頌四の四

魯は少皡の墟、禹貢徐州の域、今日の山東省兗州府曲阜縣を以て其の都とす。成王以て周公の長子伯禽を封ず、魯侯是れなり。成王周公が天下に大勳勞あるを以て、故に伯禽に賜ふに天子の禮樂を以てす、魯是に於てか頌ありと云ふ。『傳』曰く駉は僖公を頌するなり、僖公能く伯禽の法に遵ひ、儉以て用を足し、寛以て民を愛し、農を務め穀を重んじ、坰野に牧す、魯人之を尊ぶ、是に於て季孫行父、命を周に請ひ、而して史克是の頌を作る。朱子曰く舊說皆以爲らく伯禽十九世の孫僖公申の詩と、今考ふる所無し、獨閟宮の一篇僖公の詩爲ること疑無きのみ。今暫らく兩說を存して後賢の批判に一任す、子夏は周人なり、或は信ずる所ありて言ひしやも知れず、宋人獨眞說を得たりと斷ずべからず。

駉駉牡馬　在坰之野　薄言駉者　有驪有黃　以車彭彭　思無疆　思馬斯臧

駉駉たる牡馬、坰の野に在り、薄らく駉たる者を言はば、驪あり皇あり、驪あり黃あり、車を以てするに彭彭たり、思ふこと疆無し、馬の斯の臧きことを思ふ、

【句釋】駉駉は『傳』に良馬の腹幹の肥張なるなりと。坰は『傳』に遠野なり、邑外を郊と曰ひ、郊外を野と曰ひ、野外を林と曰ひ、林外を坰と曰ふ。『箋』曰く必ず坰野に牧する者は民居と良田とを避く、周禮に官田、牛田、賞田、牧田を以て遠郊の地に任ずと。薄言駉者、其の駉駉然たる馬の姿態を下に出す。驪は驪馬にして跨の白きもの。皇は黃色にして白毛の微しく交るもの。驪は純黑色。黃は黃色にして赤毛の微しく交るもの。以車彭彭、此の四馬に車を牽かす時は其の壯なること彭彭然たり。思無疆、思馬斯臧、疆は界なり、僖公の思ふことかぎり無く、其の一端として此の良馬を見れば牧畜に思念することも亦知らるとなり。

駉駉牡馬　在坰之野　薄言駉者　有騅有駓　有駓有騏　以車伾伾　思無期　思馬斯才

駉駉たる牡馬、坰の野に在り、薄らく駉たる者を言はば、騅あり駓あり、駓あり騏あり、車を以てすれば伾伾たり、思ふこと期無し、馬の斯れ才あることを思ふ、

【句釋】騅は蒼白雜毛の馬。駓は黃白雜毛の馬、桃花馬は卽ち駓なりと言ふ。駓は赤黃の馬。騏は青毛少黑なる馬。伾伾は力ある貌。無期は猶ほ無疆と云ふが如し、才は才力、馬も人間と同じく利根を要す、鈍根の馬は良馬にあらず。

駉駉牡馬　在坰之野　薄言駉者　有驒有駱　有駵有雒　以車繹繹　思無斁　思

## 馬斯作

駉駉たる牡馬、坰の野に在り、薄らく駉たる者を言はば、騂あり駱あり、騮あり雒あり、車を以てすれば繹繹たり、思うて斁ふこと無し、馬斯作らんことを思ふ、

【句釋】青驪驎を騂と言ふ、連錢驄は是れなり。白馬黑鬣を駱と言ふ。赤毛黑鬣を騮と言ふ。黑毛白鬣を雒と言ふ。繹繹は善く走る貌。斁は厭と同じ。思うて厭倦の心無きなり。思馬斯作、作は『箋』曰く之を牧して乘駕すべからしむるを言ふ。朱子曰く、奮起なり。二說共に通ず。

駉駉牡馬　在坰之野　薄言駉者　有駰有騢　有驔有魚　以車祛祛　思無邪　思馬斯徂

駉駉たる牡馬、坰の野に在り、薄らく駉たる者を言はば、駰あり騢あり、驔あり魚あり、車を以てすれば祛祛たり、思邪無し、馬斯徂かんことを思ふ、

【句釋】陰白雜毛を駰と言ふ。彤白雜毛を騢と言ふ。毫骹に在て白きを驔と言ふ、二目白くして魚目に似たるを魚と言ふ。祛祛は『傳』に彊健とあり。思無邪、此の三字は孔子が詩を說くに就て誦せられし其の源は此に出るなり。『箋』曰く伯禽の法に遵はんことを思うて專心、復邪意無きなり。思馬斯徂、牧馬走行すべからしむるを思ふなり。駉は四章八句。





有駜有駜　駜彼乘黃　夙夜在公　在公明明　振振鷺　鷺于下　鼓咽咽　醉言舞　于胥樂兮

駜たるあり駜たるあり、駜たる彼の乘黃、夙夜公に在り、公に在つて明明たり、振振たる鷺、鷺于に下る、鼓うつこと咽咽たり、醉うて言に舞ふ、于に胥樂兮、

【句釋】駜は『傳』に馬肥彊の貌とあり、馬肥彊なれば能く高きに升り遠きに進む、臣彊力なれば能く國を安んず。乘は「ノル」、黃は黃馬、『箋』曰く、此れ僖公の臣を用ふる必ず先づ其の祿食を致す、祿食足て臣其の忠を盡さざること莫きに喩ふ。夙夜在公、臣は君の事を念うて早に起き夜に寐、公の所に在る也。在公を重用して以て前の有駜の重用に對す。明明は或說に其の威儀を修め整ふるなりと。『箋』に義を明らかにし德を明らかにすと。『箋』說從ふ可し。振振は鷺の羣飛する形容、鷺は白鳥、以て臣の絜白に喩ふ。于下は臣が朝廷に在るに喩ふ。鼓咽咽、鼓聲の深長なるを形容して咽咽と言ふ。醉言舞、宴に與かる臣、鷺の羽を以て舞ふ、鼓は以て其の調子を取る。于胥樂兮、君臣共に歡樂する、燕飲の詩たること論勿し。

有駜有駜　駜彼乘牡　夙夜在公　在公飲酒　振振鷺　鷺于飛　鼓咽咽　醉言歸

于胥樂兮

駜たるあり駜たるあり、駜たる彼の乘牡、夙夜公に在り、公に在つて酒を飲む、振振たる鷺、鷺于に飛ぶ、鼓うつこと咽咽たり、醉うて言に歸る、于に胥樂兮、

有駜有駜　駜彼乘駒　夙夜在公　在公載燕　自今以始　歲其有　君子有穀　詒孫子　于胥樂兮

駜たるあり駜たるあり、駜たる彼の乘駒、夙夜公に在り、公に在つて載ち燕す、今より以て始め、歲其れ有ならん、君子穀きことあり、孫子に詒る、于に胥樂兮、

【句釋】乘牡は乘馬なり、牡は諧韻のみ。鷺于飛は眞の鷺が飛ぶにはあらず、鷺羽を以て舞ふの狀を言ふ。醉言歸、酣醉して各の退庭するなり。駒は青黑の馬、鐵驄是れなり。燕は宴。有は豐年を言ふ。穀は善。詒は遺、君臣安樂なるときは陰陽和して豐年あり、其の善道なれば、則ち以て子孫に遺るべきなり。有駜は三章各の九句。

思樂泮水　薄采其芹　魯侯戾止　言觀其旂　其旂茷茷　鸞聲噦噦　無小無大　從公于邁





思に泮水を樂んで、薄らく其の芹を采る、魯侯戾止、言に其の旂を觀る、其の旂茷茷たり、鸞聲噦噦たり、小と無く大と無く、公に從うて于に邁かん、

【句釋】思は語助。泮水は泮宮の水、天子は辟廱、諸侯は泮宮、其の東西南北に水あり、形半璧の如く、其の辟廱に半なるを以て泮水と曰ふ、宮も亦以て名く。薄采其芹、水には則ち其の芹を采取し、宮には則ち其の化を采取す。『箋』曰く、芹は水菜、言ふこころは已に僖公の泮宮の水を修め、伯禽の法に復するを樂しみ、往て之を觀、其の芹を采るなり。魯侯戾止、戾は至、芹を采るの魯人、魯侯の此に至るを觀る。旂は諸侯の建る「ハタ」なり。茷茷は傳に法度あるを言ふと。朱子曰く、飛揚するなり。朱說を可とす。鸞は車の鈴。噦噦は聲の和らげるなり。無小無大は小兒も大人も擇ばず、從公于邁、皆君の行に從がつて來る、此を稱言する者は僖公賢君、人之を見るを樂しむ。

思樂泮水　薄采其藻　魯侯戾止　其馬蹻蹻　其音昭昭　載色載笑　匪怒伊教

思に泮水を樂んで、薄らく其の藻を采る、魯侯戾止、其の馬蹻蹻、其の音昭昭たり、載ち色よく載ち笑ふ、怒らずして伊教ふ、

【句釋】藻は水草。蹻蹻は盛なる貌。重用したるは其の語を一層重くす。昭昭は公の德音を嘆ずるなり。

色は溫潤なり、顏色を和らぐるなり。笑は笑語　僖公の泮宮に至る顏色を和らげて笑語す。匪怒伊教、怒る所あらず、循循然として善く人を敎ふるなり。

思樂泮水　薄采其茆　魯侯戾止　在泮飲酒　既飲旨酒　永錫難老　順彼長道　屆此羣醜

思に泮水を樂んで、薄らく其の茆を采る、魯侯戾止、泮に在つて酒を飲めり、既に旨酒を飲めり、永く老い難きを錫はん、彼の長道に順つて、此の羣醜を屆む、

【句釋】茆は『傳』に鳧葵なり。葉の大さ手の如く赤圓にして滑なり、江南の人之を蓴菜と言ふ。『古義』曰く、鮒鯉を雜へて羹と爲すべし。既飲旨酒、永錫難老、『箋』曰く、泮に在て酒を飲む、先生君子を徵し、之と飲酒の禮を行うて因て以て事を謀る、已に美酒を飲んで、長く其の老いしめ難きを錫ふ、老いしめ難きは最も壽考なり、長く之を錫ふとは王制に云ふ所、八十は月に存を告ぐ、九十は日に秩あるが如き者か。順彼長道、屆此羣醜、長道は猶ほ大道の如きなり。屆は收服、醜は衆、衆は魯國の人民を言ふ。羣臣皆曰く願くは君公此の大道に順從して君の君たる信義禮敎を重んじ、以て羣衆の心を收服し玉へよと頌禱の詞を捧ぐるなり。

穆穆魯侯　敬明其德　維民之則　允文允武　昭假烈祖　靡有不孝





自求伊祜

穆穆たる魯侯、其の德を敬明にし、威儀を敬愼す、維民の則なり、允に文允に武、昭かに烈祖に假り、不孝あること靡くして、自ら伊の祜を求めよ、

【句釋】其德は內に修むるもの。威儀は其の外に臨むもの。假は至、烈祖卽ち周公魯侯の德に至る。『箋』曰く、其の聰明乃ち祖の德を美むるに至る、伯禽の法に遵ふを言ふ。靡有不孝、烈祖に對して不孝の孫とは爲らず。自求伊祜、祜は福なり、國人之を法とし傚はざるは無し、皆庶幾ふ力行して自から福祿を求めんと。

明明魯侯　克明其德　既作泮宮　淮夷攸服　矯矯虎臣　在泮獻馘　淑問如皐陶

在泮獻囚

明明たる魯侯、克く其の德を明かにし、既に泮宮を作れり、淮夷の服する攸、矯矯たる虎臣、泮に在つて馘を獻ず、淑く問ふこと皐陶の如く、泮に在つて囚を獻せん、

【句釋】明明と前章の穆穆とを對照して前は敬愼を主とする故穆穆と稱し、此れは其の德を主とする故明明と言ふと解したる人あり。章の意然く區別したるにあらず、穆穆を此れに移し、明明を彼れに移すも何等の異なる所あらず。蓋し其の德明明なるを知らんと欲せば、泮宮を作りて淮夷の服する攸を見て

知るべしとなり。●●矯矯は武の貌。●馘は格す所の者の左の耳を言ふ、武力虎の如き臣、彼の惡人を格して左耳を獻ずるなり。●淑は善、●問は罪を十分に調査するなり。●皐陶は舜の世の獄官、乃ち善く獄を斷ずる皐陶の如き者をして囚を獻ぜしむ。伐に功ありて任ずる所其の人を得るを言ふ。詩人魯侯の泮に在すに因て其れ是の功あらんことを願ふなり。

濟濟多士　克廣德心　桓桓于征　狄彼東南　烝烝皇皇　不吳不揚　不告于訩
在泮獻功

濟濟たる多士、克く德心を廣む、桓桓として于に征す、彼の東南を狄く、烝烝皇皇、吳しからず揚らず、訩を告げず、泮に在つて功を獻ず、

【句釋】●狄は『箋』に剔に作るべしと。剔は治なり。●蘇子由曰く、狄は遡と通ず。『釋文』曰く狄は遠なり。王氏曰く、攘うて之を遡ざく。敵をして東南方に遠走せしめたるを言ふ。●烝烝皇皇は『箋』曰く猶ほ進進往往の如し。朱子曰く盛なり。盛んなるが故に進進往往なり。●不吳不揚は讙譁ならず、大聲せざるなり、軍律の整嚴に由る。●不告于訩、訩は訟なり、爭訟無きを言ふ、軍紀の正知るべし。●在泮獻功、軍士は功を爭うて訟るが如きこと無し、唯泮宮の內に在りて、其の戰功を獻ずとなり。

角弓其觩　束矢其搜　戎車孔博　徒御無斁　既克淮夷　孔淑不逆　式固爾猶





淮夷卒獲

角弓其れ觩たり、束矢其れ搜たり、戎車孔だ博し、徒御斁ふこと無し、既に淮夷に克ち、孔だ淑くして逆かず、式爾の猶を固くせば、淮夷卒に獲てん、

【句釋】●角弓は前に辨あり。●觩は弓の健なる貌。●束矢、五十矢を束と爲す。●搜は『箋』に矢の勁疾を言ふと。●戎車は兵車。●孔博は廣大なるを言ふ。●徒は步兵。●御は騎兵。●無斁、步兵も騎兵も皆各の其の事に當り、斁ふと無し。●既克淮夷、僖公此の兵衆を以て淮夷を征伐して之に勝つ。●孔淑不逆、其の士卒甚だ善く軍法に順して逆を爲す者無し。●式固爾猶、猶は謀なり。●爾の軍謀を堅固にするの故を以て、淮夷卒獲、淮夷盡く心服して我に征服せらるとなり。

翩彼飛鴞　集于泮林　食我桑黮　懷我好音　憬彼淮夷　來獻其琛　元龜象齒
大賂南金

翩たる彼の飛鴞、泮林に集る、我が桑黮を食ひ、我が好音に懷く、憬れる彼の淮夷、來りて其の琛を獻ず、元龜象齒、大に南金を賂らん、

【句釋】●翩は飛ぶ貌。●鴞は惡聲の鳥なり、和名「フクロフ」なり。●集于泮林、我が泮林中に多く集る。而して食我桑黮、我が泮地の桑の實を食ふ、●黮は甚と同じ、實なり。●懷我好音、●鴞は元來惡聲の鳥なるも

我に歸就するが故に好音を以てする、卽ち我が恩惠に感ずるなり。憬彼淮夷、『傳』に憬は遠行の貌と。朱子曰く、憬は覺悟なり。『說文』曰く。心に從ふ景の聲、覺悟なり。『毛詩』應に作る故に遠行の貌と訓す。憬は蓋し三家詩に出づと。淮夷が王に從ふの善なるを覺悟るなり。來獻其琛、琛は寶の貴きものを稱す、其の獻ずる琛は何ぞや、曰く元龜象齒なり、龜の大なるものが元龜、卽ち尺二寸の大龜の甲を言ふ、象齒は卽ち象牙なり。賂は『說文』に遺なりと。南金は南方の荆揚の州より出るを以て言ふ、荆州と揚州は所謂金山も銅山も多くありて、諸州の及ばざる富を有するなり、今貢する所は金銀銅の三種なりと言ふ。淮夷が獻ずるに依て荆揚も亦淮夷の地と言ふこと勿れ、淮夷が所藏する此の寶物を貢獻すとなり。

【評論】泮水は八章八句『傳』に泮水は僖公能く泮宮を修むるを頌するなり。

閟宮有侐　實實枚枚　赫赫姜嫄　其德不回　上帝是依　無災無害　彌月不遲
是生后稷　降之百福　黍稷重穋　稙稺菽麥　奄有下國　俾民稼穡　有稷有黍
有稻有秬　奄有下土　纘禹之緒
閟宮侐　實實枚枚たり、赫赫たる姜嫄、其の德回ならず、上帝是れ依み、災無く害無し、





月を彌へて遲からず、是れ后稷を生み、之に百福を降せり、黍稷の重穋、稙稺菽麥あり、奄に下國を有ち、民をして稼穡せしむ、稷あり黍あり、稻あり秬あり、奄に下土を有ち、禹の緒を纘げり、

【句釋】閟は『傳』に閉なりと。『箋』に神なりと。朱子曰く、閟は深閟なり。之を要するに祕字と同義に用ふるを以て、是の三說共に通ず、乃ち姜嫄の神廟を稱して閟宮と言ふなり。有侐、侐は『傳』に淸淨なりと。實實は宮の廣大を言ふ。枚枚は宮の礱密を言ふ。赫赫姜嫄、其德不回、回は回曲、姜嫄の德は眞德なり、回曲ならざるなり。上帝是依、上帝が其の子孫に依るなり、其の子孫に依るとは、子孫を護るの意。無災無害、姜嫄が上帝の護るに依て災害無きを言ふ。『箋』曰く、姜嫄の德貞正にして回邪ならず、天是を用て馮依して精氣を降し、其れ之に任じて又災害無し。彌月不遲、姙娠十月にして子を生むは遲しとせざるなり。是生后稷、姜嫄が后稷を生む、其の產は安かりしなり。降之百福、『箋』曰く、天神多く此の后稷に福を與ふるなり、福とは何ぞ、乃ち下の句に示せる黍稷等を言ふ。后稷は生れて棄と名く、長大にして堯之を登用し稷官に居らしむ。重は後熟、穋は先熟、稙は先種、稺は後種を言ふ。重、穋、稙、稺にして穀名にはあらず、要するに黍稷菽麥皆共に能く秀出するを言ふ。奄有下國、下國とは自分の領地を言ふ、領地を有するに至る。邰卽ち今日の陝西省乾州武功縣の西南なり。俾民稼穡、民をして稼穡の道を知らしめたるは后稷の力なり。有稷有黍、有稻有秬、四の有字大に力あることを知

らざるべからず、秬は黑黍を言ふ。下土は下國と同じ、諧韻なるが故に前に下國と言ひ、此には下土と言ふ。纘禹之緒、纘は繼纘、緒は緒業、禹は洪水を治めて功あり、其の緒業を繼ぎて后稷は民をして粒食せしむるの功ありしなり。

后稷之孫　實維大王　居岐之陽　實始翦商　至于文武　纘大王之緒　致天之屈
于牧之野　無貳無虞　上帝臨女　敦商之旅　克咸厥功　王曰叔父　建爾元子
俾侯于魯　大啓爾宇　爲周室輔

后稷の孫、實に維大王、岐の陽に居り、實に始めて商を翦てり、文武に至り、大王の緒を纘ぎ、天の屈を、牧の野に致す、貳ふこと無く虞ること無かれ、上帝女に臨めり、商を敦むるの旅、克く厥の功を咸うす、王の曰く叔父、爾の元子を建て、魯に侯たらしめん、大に爾の宇を啓き、周室の輔たらしめん、

【句釋】大王は卽ち文王の祖父なり、后稷の後裔、世邰に封ぜられ、邰より豳に遷り、豳より居岐之陽、岐山の南に移居するなり。實始翦商、殷は世商に封ぜらる、是の故に殷商と熟語す、此の殷商を全く滅しし武王なりと雖も、其の端を發せしは大王に在るなり。翦は翦斷、商の帝室を翦斷せるなり。至于文武、文王と武王。纘大王之緒、致天之屈、屈は、『箋』に殛なりと、殛は誅なり、文王武王が殷の紂王を牧之野に於て誅せしは、是れ大王が無道を誅せんと志ざせる緒を纘ぎたるに外ならず。無貳無虞、『箋』



曰く、虞は度なり、天の紂を商郊の牧野に罰殛する所以、其の時の人民、皆武王の是の如きを樂しむ、故に之を戒めて云ふ二心あること無かれ、復計度すること無かれとなり。上帝臨女、上帝女を視護す、至れば則ち克く勝つ。敦商之旅、敦は治、旅は衆、武王に從つて商を治めたる衆將を言ふ。克咸厥功、咸は同、衆將心を一にして皆商を征して厥の功を同じうす、周公も其の中に在ること勿論なり。王曰、武王の子成王が曰くなり。叔父は周公を指す。建爾元子、元子は長子、卽ち周公の子、魯侯伯禽なり。俾侯于魯、侯は君侯、伯禽を封じて魯侯たらしむる也。大啓爾宇、宇は土地の意味に見て可。成王が周公に向て曰く、我大に爾の土地を啓きて之に居らしめ、以て爲周室輔、『史記』魯世家に云ふ武王既に殷に克つ、周公旦を少皡の墟曲阜に封ず、是を魯公と爲す、周公封に就かず、是に於て卒に成王を相て其の子伯禽をして代て封に魯に就かしむ。然らば則ち周公の武王の時に於る已に魯の封を受く、但身魯に之かず、伯禽をして國に就かしめ、後成王大に土宇を啓き方七百里ならしむ、魯の封疆是に於て始めて定る。周公が最初辭したりとの事は、『毛詩』に於て分明ならず、韓詩傳はらば或は之れあらん、其れ遂に能く知る能はざるなり。

乃命魯公　俾侯于東　錫之山川　土田附庸　周公之孫　莊公之子　龍旂承祀
六轡耳耳　春秋匪解　享祀不忒　皇皇后帝　皇祖后稷　享以騂犧　是饗是宜

降福既多　周公皇祖　亦其福女

乃ち魯公に命じ、東に侯たらしめ、之に山川、土田附庸を錫へり、周公の孫、莊公の子、龍旂祀に承へ、六轡耳耳たり、春秋解らず、享祀忒はず、皇皇たる后帝、皇祖后稷、享るに騂犧を以てせり、是れ饗け是れ宜し、福を降すこと既に多く、周公皇祖も、亦其れ女に福せん、

【句釋】乃命魯公、上章は魯公を封ぜんの意を言ひ、此の章は正しく魯公に策命するなり。俾侯于東、東は東藩卽ち魯國なり。錫之山川、土田附庸、二句一讀法、錫は下の七字を貫く、土地と人民を以て魯公に錫ふなり。周公之孫、莊公之子、僖公は周公の孫にして莊公の子なり。龍旂は交龍の旂、諸侯の建る所。承祀、龍旂を建て祀に承るは天子の禮を僭せざるなり、天子の旂は日月の旂なればなり。六轡は六馬なり。耳耳は『傳』に耳耳然として至盛なりと。朱子曰く、耳耳は柔從なり。朱說を可とす、成王が周公を德とし、魯公に命じて孟春に上帝を郊外に祀らしむ、周公の德を明らかにし、又以て其の國を重んずるなり、春秋匪解、廟祭の春夏秋冬絕えざるなり、解は懈と同じ。享祀不忒、忒は變、變改せざるを言ふ。皇皇は大の義。后帝は上帝。皇祖后稷、皇祖は卽ち后稷なり。享以騂犧、祭時に騂卽ち赤色の牛を以てす、天子と同じうするを許されたるなり。是饗是宜、『箋』に天も亦之を饗け之を宜とすとあり、是饗と饗之とは文法上異なるも詩に於ては大なる異あらざるなり。降福既多、周公皇祖、亦其福





女、周公以後の羣公を指して皇祖と稱す、后稷の皇祖にはあらず。

秋而載嘗　夏而楅衡　白牡騂剛　犧尊將將　毛炰胾羹　籩豆大房　萬舞洋洋
孝孫有慶　俾爾熾而昌　俾爾壽而臧　保彼東方　魯邦是常　不虧不崩　不震
不騰　三壽作朋　如岡如陵

秋にして載ち嘗すれば、夏よりして楅衡す、白牡騂剛、犧尊將將たり、毛炰胾羹、籩豆大房、萬舞洋洋たり、孝孫慶あり、爾をして熾にして昌ならしめん、爾をして壽にして臧からしめん、彼の東方を保ち、魯邦是れ常あり、虧けず崩れず、震かず騰らず、三壽朋を作し、岡の如く陵の如し、

【句釋】秋而載嘗、嘗は秋の祭名なり。楅衡は牛の角に横木を設け人を突かせざるなり。夏よりして其の牲牛に楅衡し已に用意を爲す。白牡は白牛、傳に周公の牲なり、白牡は殷の牲、周公死して王禮あり、故に文王武王と同じく騂剛を用ひず、魯公は諸侯なれば嫌はざるなり。犧尊は牛の形を尊の中腹に畫けるを曰ふ。將將は盛に且美なるなり。毛炰は『傳』に豚とあり、熟湯を肉に灑ぎ其の毛を去て之を炰すなり。胾羹は肉を切を胾と曰ひ、其の肉を烹たるものを羹と曰ふ、太羹と鉶羹との二品あり。太羹は肉のみ烹、鉶羹は野菜を混じて烹る。籩豆は祭器の名。大房は玉飾の俎、其の制足間に横木あり、其の下に兩跗あり、上は前堂、下は房室に似たるを以て名く。萬舞は二舞の總

名なり。數多く舞ふの意にあらず。洋洋は其の舞ふ者の多き形容なり。孝孫有慶、此の如く禮樂を供して廟祭を厚うするは洵に是れ孝孫なり、慶福を得んと必せりとなり。俾熾而昌、古人曰ふ熾は富貴の盛、昌は榮光の盛なりと。其の盛ならしむる者は周公皇祖の靈の致す所。壽而臧、臧は善、壽長うして其の孝孫に善事あるなり。保彼東方、保は保安。魯邦是常、常は變の反對、變せざるが故に常、東方の魯國が無事太平なるなり。不虧不崩、不震不騰、虧崩震騰は共に人の忌む所、然るに魯國は安全にして克く常を保つなり。『箋』曰く、虧崩は皆毀壞を謂ふ。震騰は皆僭踰相ひ侵犯するを謂ふ　三壽は『箋』に三卿とあり。朱子曰く、或は曰く公の壽、江と陵と等うして三と爲すなり。共に今斷定しがたし。如岡如陵は壽の長くして且堅固なるを謂ふ。徐光啓曰く、籩豆の陳、周公の事十六、羣公の事十二。

公車千乘　朱英綠縢　二矛重弓　公徒三萬　貝冑朱綅　烝徒增增　戎狄是膺
荆舒是懲　則莫我敢承　俾爾昌而熾　俾爾壽而富　黃髮台背　壽胥與試　俾爾昌而大　俾爾耆而艾　萬有千歲　眉壽無有害

公車千乘、朱英綠縢、二矛重弓あり、公徒三萬、貝冑朱綅、烝徒增增たり、戎狄是れ膺り、荆舒是れ懲せば、則ち我を敢て承ぐ莫し、爾をして昌にして熾ならしめ、爾をして壽にして富ましむ、黃髮台背にして、壽なるもの胥與に試ひらる、爾をして昌にして大ならしめ、爾をして耆にして艾ならしむ、萬有





千歲、眉壽にして害あること無けん、

【句釋】公車千乘、此の章は從征以て功を奏せし事を敍す。諸公の兵車、千乘は大國の兵賦。朱子曰く、千乘の地は三百十六里有奇、成方十里に革車一乘を出す、此の一乘に甲士三人、左は弓を持し、右は矛を持し、中人は車を御す、步卒七十二人、重車を將ふる者二十五人、今謂ふ千乘は天子の萬乘に對す、其の大數を謂ふなり。朱英は車の飾、朱色の英、右人の持つ所。綠縢は綠色の縢、左人の持つ所。二矛重弓、二箇の矛と二張の弓、朱英と綠縢は卽ち此の矛と弓とを飾るなり、公徒は公の徒衆、步兵を謂ふ。三萬、『箋』曰く、三萬は成數を擧るなり。朱子曰く、車千乘、當に十萬人を用ふべし、而して步卒は七萬二千人、然れども大國の賦、適に千乘に滿つ、苟くも盡な之を用ひば、是れ國を擧て行くなり、故に其れ之を用ふる三軍のみ、三軍は車三百七十五乘、三萬七千五百人、其の步卒は二萬七千人に過ぎず、乃ち三萬は其の成數を謂ふ。華谷曰く、魯頌夸大の詞多し、曰く千乘、曰く三萬、必ずしも其の數の盡合するを求めず。貝冑は冑は兜鍪を謂ふ、貝は其の飾なり。烝徒は烝は進、徒は兵、進軍する兵士。增增は衆多の形容。戎狄は西北の敵。膺は膺當。荆舒は東南の敵。劉氏曰く、荆は楚の本號、荆山を以て名を得、舒は楚の與國。懲は懲艾、共に是れ彼の罪を鳴らし、兵に因て彼を戒むるを膺懲と謂ふ。則莫我敢承、承は禦なり、彼等は此の正義の軍を禦ぐ能はず

となり、僖公、齊に從つて楚を伐ち、遂に召陵に盟ふ、僖公其の功を專らにするを得ずと雖も、而かも詩人の詞、溢美あることを容す、讀者詞を以て意を害せざれ。俾爾昌而熾、俾爾壽而富、此の十字の意、上章と同じ。黃髮台背は身體の上に長壽の相が露はるるを言ふ。壽胥與試、『箋』曰く、壽にして相與に試せん、氣力を講じ衰倦せざるを言ふ。朱子曰く、此の義未詳。蘇子曰く、其の壽うして相與に其の才力を試みて以て用を爲んことを願ふなり。蘇說は箋說に近し、今之を取る。俾爾昌而大、俾爾耆而艾、普通の說は六十を耆と言ひ、五十を艾と言ふ。此の句は單に壽の長きを言ふ、常說と關係なし。萬有千歲、眉壽無有害、萬年も千年も國を保ち身を安んじ、曾て侵害を受ること無しとなり。劉氏曰く、此の章は前章祭祀して福を獲るの意を承けて、公を美むるに武功を以てし、公を祝するに福壽を以てするものなり。

泰山巖巖　魯邦所詹　奄有龜蒙　遂荒大東　至于海邦　淮夷來同　莫不率從

魯侯之功

泰山巖巖たり、魯邦の詹る所、奄に龜蒙を有ち、遂に大東を荒め、海邦に至り、淮夷來同して、率從せざるは莫し、魯侯の功なり、

【句釋】泰山巖巖、魯邦所詹、泰山は齊魯二國に挾がる、南は魯、北は齊に當る、今魯を主として言ふ。





詹は『傳』に至と訓す、今用ひず、瞻と解するなり。奄有龜蒙、龜山と蒙山の二を有するに至る、龜山は山東兗州府泗水縣の東北に在り、蒙山は山東沂州府費縣の西北に在り、『統志』に其の魯地の東に在るを以て一名東山と言ふ。『孟子』に所謂孔子東山に登りて魯を小とすとは是れ也。遂荒大東、荒は治なり、大東は東方一帶を言ふ。至于海邦、山東の地北方は千里盡な山なれど東方は渤海にも共海にも共に近し要するに東方は悉皆魯の有する所の意なり、荒は『傳』に有なりと。『箋』に奄なりと、今治の義を以て有と奄と其の中に收む。淮夷は今日の河南省の地を言ふ。淮は音「クワイ」「ワイ」の二音通用す、淮水は河南の南陽平氏縣の胎簪山より出て東北桐柏山を過ぐと『水經』に在り。來同は『箋』に同盟を爲すなりと。莫不率從、互に相率ゐ來りて以て魯に從がはざるは莫し。魯侯之功、魯の僖公の功に歸す。

保有鳧繹　遂荒徐宅　至于海邦　淮夷蠻貊　及彼南夷　莫不率從　莫敢不諾

魯侯是若

鳧繹を保有し、遂に徐宅を荒め、海邦に至る、淮夷蠻貊、及び彼の南夷、率從せざるは莫し、敢て諾せざること莫し、魯侯是れ若ふ、

【句釋】保有は字の如し。鳧は鳧山、繹は繹山、鳧山は山東省兗州府鄒縣の東に屬す、魚臺の界に接する山、繹山は鄒縣の南に屬す、嶧山と書する多し。『左傳』に邾の文公繹に遷る、宣十年邾を伐て繹を取

る、卽ち此の嶧なり。京相璠曰く、繹邑は嶧山に依て名と爲す。『水經注』に山の東西二十里、高秀獨出、積石相臨んで、殆んど土壤なし、石間孔穴多し、洞達相通じて、往往數間屋の如くなる處あり、俗之を嶧孔と言ふ。『秦始皇紀』に始皇東郡縣に行き、鄒嶧山に上り石を立つ、魯の諸儒生と議し、石を刻し秦の德を頌すと。徐宅は卽ち徐國、宅は居と同義、徐州の居までを荒奄するに至る。至于海邦、共に是れ東方に屬する地。淮夷蠻貊、蠻は南夷、貊は東夷。及彼南夷、此の南夷は卽ち荆楚を指す。莫敢不諾、魯侯是若、若は順なり、魯侯に順應せざる國は莫きなり。大意上章と略同じ。

天錫公純嘏　眉壽保魯　居常與許　復周公之宇　魯侯燕喜　令妻壽母　宜大夫庶士　邦國是有　既多受祉　黃髮兒齒

【句釋】天錫公純嘏、『箋』曰く、純は大、受福を嘏と曰ふ、廟祭禮儀此の如く修して怠らず、乃ち天之に壽福を錫ふとなり。眉壽保魯、壽長うして其の邦卽ち魯を保有せん、是れ天の錫ふ所の福あればなり。居常與許、居は居住、常は嘗にも作る、薛國の旁に在る地名、許は許田、魯の朝宿の邑と『箋』に示せり、諸侯が各の其の邦より周京に朝賀する時、京師の近旁に其の宿を賜はる之を采邑と曰ふ。我が德川





氏時代に大名が參勤するに就て各の其の屋敷を江戸に錫はる、卽ち此の采邑なり。『箋』曰く、春秋魯の莊公三十一年、臺を薛に築く、是れ周公常邑許田ありとは未だ聞かず、六國の時、齊に孟嘗君あり、邑を薛に食む、是を以て常と薛と一ならんとなり。復周公之宇、朱子曰く、常と許とは皆魯の故地、諸侯に侵されて而かも未だ復せざるもの、故に魯人是を以て僖公に願ふ、周公の土宇を全うせんと。魯侯燕喜、燕は燕安、喜は喜樂。令妻、令は善、ヨキ妻なり、令息なぞもヨキ兒なり。聲姜卽ち僖公の妻。壽母は僖公の母、壽は令字に對して用ふ、壽にして幸福なる母、此の母は莊公の妾にして、僖公は莊公の子なり。宜大夫庶士、僖公の身邊、妻も母も大夫も庶士も皆志を一にして內外共に宜し、是を以て燕飲し、是を以て邦國是有、安全に其の邦を保有するなり。既多受祉、黃髮兒齒、髮の黃色となるは長壽の徵にて、齒の脫けて幼兒の如くなるは亦長壽の相なりとなり。僖公の在位三十三年、亦短と言はざるなり。武公の九年、懿公の九年、伯御の十二年、隱公の十一年、桓公の十八年に比すれば、既に多くの祉を受けたるなり。

徂來之松　新甫之栢　是斷是度　是尋是尺　松桷有鳥　路寢孔碩　新廟奕奕

奚斯所作　孔曼且碩　萬民是若

徂來の松、新甫の栢、是れ斷り是れ度り、是れ尋にし是れ尺にす、松桷鳥なるあり、路寢孔だ碩なり、

新廟奕奕たり、奚斯作れる所、孔だ曼く且碩なり、萬民是れ若へり、

【句釋】徂來之松、徂來山に聳ゆる松。新甫之栢、新甫山に秀づる栢、共に山東省の兗州府に在り。是斷是度、是尋是尺、松栢は樹中の大なるもの、八尺の尋に斷るも、一尺の尺に度るも自由なり、修廟の工事に用ふるが爲めなり。松桷有舄、舄は音「セキ」樹の大なるを形容す。桷は榱タルキなり。路寢は正寢、公の寢所。新廟奕奕、閟公の新廟を建つ、其の基模孔だ姣美なり。『箋』曰く、舊を修するを新と曰ふ、新なるものは姜嫄の廟なり、乃ち宗廟を僖公が修復するなり。奚斯所作、奚斯は公子なり、名は魚字は奚斯、此の工匠を監督したる人、尋常の木工を言ふにあらず。孔曼且碩、曼は長、建物の連續するを言ふ、碩は廣大の形容。萬民是若、若は順、萬民ガ是れに若ふか、萬民ニ是れ若ふか、ガでも、ニでも、主客の相違のみ、然れども古解して萬民の望に順へりと爲す、民心に背かずして之に順へりとなり。

【評論】閟宮は九章。五章は十七句、二章は八句、二章は十句を以て成る。胡氏曰く、竊かに謂ふ、閟宮は是れ殷武に依倣して作る、殷武は首に高宗が荆楚を伐つことを言ひ、次に、侯國服從するを言ひ、方に壽考にして且寧きに及び、遂に之を結ぶに寢廟を作るを以てす。閟宮は首に僖公の家世を原ね、次に、祭祀を承け夷狄を攘ひ境土を復するに及び、極めて其の壽考を頌し、亦遽かに之を結ぶに新廟を作





るを以てす。殷武と一手に出るが如し、特に殷武は簡にして嚴なり、閟宮は張にして夸なるのみ。今言ふ殷武の簡嚴は其の德充つればなり。閟宮の張夸は其の德足らざればなりとの意ならんも、是れ朱子一派の說、未だ深く信ずるに足らず。讀者宜しく細心注意すべきなり。

魯頌四篇、二十四章、二百四十三句。

## 商頌四の五

商の國初を案ずるに、契、舜の司徒(裁判官)と爲り、商に封ぜらる。商は卽ち今日の陝西西安府是れなり。而して契より十四世の孫を成湯と爲す、乃ち亳に都す、亳は卽ち今日の河南歸德府夏邑縣なり。湯より十六世の盤庚に至り殷に遷る、乃ち盤庚以後紂王に至るまでを殷と稱す。紂王に至り、武王の爲めに滅ぼされ、武王は其の宗を絶滅するに忍びず、紂の庶兄微子啓を宋に封ず、殷の禮樂を修せしめんが爲めなり。宋の地も亦河南の歸德府とす。微子より戴公に至るまで凡て十世なり。其の戴公の大夫を正考甫と名く、正考甫は卽ち孔夫子の七世の祖とす。周に入て商頌十二篇を樂官の大師より傳へ、以て宋に歸りて先王を祭る。是より先き商は禮樂廢壞し、君政治に怠慢、祭祀朝聘・養賢待賓の事修めざりしなり。而して考甫之を傳へしも、孔子の時に至り、又七篇を失なうて僅かに此の五篇を存す。若し孔夫子微りせば、此の五篇も亦失なひしなん、今にして之を見るを得るは、蓋し孔夫子の德と謂ふべし、豈等閑視するを得んや。

猗與那與　置我鞉鼓」　奏鼓簡簡　衎我烈祖」　湯孫奏假　綏我思」成　鞉鼓淵淵　嘒嘒管聲　旣和且平　依我磬聲」　於赫湯孫　穆穆厥聲　庸鼓有斁　萬舞有奕





我有嘉客」　亦不夷懌」　自古在昔　先民有作　溫恭朝夕　執事有恪　顧予烝嘗」

湯孫之將

猗與那き與、我が鞉鼓を置ねたり、鼓を奏すること簡簡たり、我が烈祖を衎ましむ、湯孫奏し假し、我が思を綏じ成れり、鞉鼓淵淵たり、嘒嘒たる管聲、既に和し且平なり、我が磬聲に依れり、於赫なる湯孫、穆穆たる厥の聲、庸鼓斁なることあり、萬舞奕たるあり、我に嘉客あり、亦夷懌せざらんや、古より在昔、先民作すことあり、溫恭なること朝夕にして、事を執りて恪むあり、予が烝嘗を顧みよ、湯孫の將ものなり、

【句釋】猗與は歎辭。那は多なり。置我鞉鼓、鞉も鼓も共に樂器なり。奏鼓は鞉をも兼ぬる也。『傳』曰く、夏后氏は足鼓、足にて奏す、殷人は置鼓、置て奏す、周人は縣鼓、縣て奏すと。簡簡は鼓聲和大にして簡簡然たるなり。衎我烈祖、衎は樂、烈祖は成湯、乃ち功烈の祖湯王を樂ましむ。湯孫奏假、湯王の孫太甲堂に升るの樂を奏し、以て祖考に薦むる。綏我思成、『箋』曰く、乃ち我が心の思ふ所を安んじて之を成す、神明來格を謂ふなり。『禮記』曰く、齊するの日其の居處を思ひ、其の笑語を思ひ、其の志意を思ひ、其の樂しむ所を思ひ、其の嗜む所を思ひ、齊すること三日、乃ち其の爲に齊する所の者を見、祭するの日室に入る、儼然として必ず其の位を見ることあり、周旋戶を出づ、肅然として必ず其の容聲

を聞くことあり、戸を出て聽き、愾然必ず其の歎息の聲を聞くことあり、此れを之綏我思成と謂ふ。此の『箋』説可なるものの如し。朱子が未詳と言ふは蓋し強て異を爲すのみ。淵淵、喤喤は鼓聲の和と管聲の平と調子を合す形容なり。依我磬聲、依とは堂下の管鼓と堂上の玉磬との聲が互に妨ぐる所なく、聲が各の其の特長を失なはずして相合するを言ふ。於赫は嗟嘆の詞。穆穆は『箋』美なりと。厥聲は管も鼓も磬も三聲共に合して嘆美するなり。庸鼓は鏞鼓卽ち大鼓なり。有瞡は瞡瞡然として盛んなり。萬舞は文舞と武舞との總名。有奕は奕奕然として閑なり、庭に陳ぬるに此の舞を以てするは既に祭事了りて後なり。我有嘉客、『箋』曰く、嘉客は二王の後、及び諸侯來りて祭を助くる者を言ふ。亦不夷懌、夷も懌も共に說と同義の字、客も祖靈も共に說ぶなり。自古在昔の四字は頗る恠し。『傳』曰く、先王之を稱して在古と曰ひ、古に在昔と曰ひ、昔に先民と曰ふ。要するに佛經に過去久遠劫と言ふ意味に近し。極めて古より近古に至るまでの意味ならん。先民は先賢なり。『傳』曰く、有作は作る所あるなり。朱子曰く、恭敬の道、古人行ふ所と。所作と行とは同一義なり。溫恭朝夕、其の禮義溫溫然として恭敬、何ぞ朝夕の異あらん。執事、祭事を執るなり。有恪、恪は卽ち敬。顧予烝嘗、烝祭は冬、嘗祭は秋、嘉客に我が殷家に時祭あるの事を顧うて受け玉へとなり。湯孫之將、『疏義』曰く、神は非禮を受けず、故に此の湯孫の將る所なりと曰ふ。則ち祖孫の間、精神相感ず、其の之を享くること必然たり。





【評論】那は一章二十二句。魯の大夫閔馬父曰く、正考甫、商の名頌を較し、那を以て首と爲す、其の輯の亂に曰く、云云と卽ち此の詩なり。

嗟嗟烈祖　有秩斯祜　申錫無疆　及爾斯所　既載清酤　賚我思成　亦有和羹
既戒既平　鬷假無言　時靡有爭　綏我眉壽　黃耇無疆　約軝錯衡　八鸞鶬鶬
以假以享　我受命溥將　自天降康　豐年穰穰　來假來饗　降福無疆　顧予烝嘗

嗟嗟烈祖、秩の斯の祜あり、申ねて錫ふこと疆無く、爾の斯の所に及べり、既に清酤を載せ、我に思うて成るを賚ふ、亦和羹あり、既に戒しめ既に平へり、鬷め假して言ふこと無し、時に爭ひ有ること靡し、我を綏んずるに眉壽、黃耇にして疆無し、約軝錯衡、八鸞鶬鶬たり、以て假し以て享る、我が命を受ること溥く將なり、天より康きを降し、豐年穰穰たり、來り假り來り饗けよ、福を降すこと疆無し、予が烝嘗を顧みよ、湯孫の將もの、

【句釋】烈祖は威烈の祖、成湯を指す。有秩斯祜、秩は常、變の反對が常、祜は福、福を有ちて變あること無し。申は重。錫は賜。及爾斯所、今の王の今日を斯所と言ふ。烈祖の威福疆無うして、今に至る

まで子孫、其の錫を受け疆りなしとなり。既載清酤、酤は酒、清酒を尊に載て以て神靈に獻ず。賚は賜と同じ。思成の義前章と同じ、我が孝孫の思を樂しみ成さしむなり。王肅曰く、先祖我に我が思の成さんと欲する所を賜ふ。孔穎達曰ふ、神靈來至、我が孝子思ふ所成るを得。蔡汝南曰く、我に思成を賚ふ、所謂其の誠あるときは其の神あり。亦有和羹、『箋』曰く、和羹するものは、五味和調し、腥熟節を得、之を食うて人性に於て安和す、諸侯和順の德あるに喩ふ、要するに肉と野菜とを調和して食ふが、人の身體に宜しきなり。今人が食ふにあらず之を以て祖に進むるなり。既戒既平、戒は謹慎、平は和平、祭祀の事を疎略にせず、謹慎和平するにあり。鬷は奏と同義。假は至。無言、廟祭するときは恭肅敬戒、故に言ふこと無し。時靡有爭、已に言ふことなし、何ぞ爭ふことあらん。綏我眉壽、黃耇無疆、此の意は前章に屢ば辨ぜり。約軝錯衡、八鸞鶬鶬、采芑篇、載見篇に於て已に辨ぜり、諸侯の來りて祭を助くる者を言ふ。以假以享、是の如き事を假し、是の如き物を享る也。我受命溥將、溥は廣、將は大、此の祭を主る我が責任は頗る廣大なりとの意、萬國の諸侯をして懽んで以て我に背かざらしむ、其の受命や蓋し重大なり。自天降康、豐年穰穰、時和し歲豐かにして祭禮成るを言ふ、穰穰、黍稷穰穰として多きなり。來假來饗、『箋』曰く、饗は酒を獻じ、神をして之を饗しむるを言ふ。降福無疆、無疆の文字三處に用ふ、逾よ重く、逾よ進む、神靈我に久長の福を與ふ。顧予烝嘗、湯孫之將、『箋』曰く、此れ





中宗を祭る、諸侯來つて祭を助くるの所、而して湯孫として之れ將ると言ふは、中宗の此の祭を享る、湯の功に由る故に之を本づけ言ふ。古義曰く、此の八字、那篇の結語と意微別あり、彼は重きこと孫の一字に在り、一氣を以て感通するを言ふ、此れは重きこと烝嘗の二字に在り、我時時祭祀に勤むることと此の如し、當に烈祖の鑑念する所と爲るべしと謂ふなり。

【評論】烈祖は一章二十二句。輔慶源曰く、那と烈祖と、皆成湯を祭るの樂、然れども那詩は專ら樂聲を言ひ、烈祖に至りては則ち夫の酒饌に及ぶ、商人聲を尙ぶ、豈始めて樂を作るの時は那を歌ひ、既に祭して後、烈祖を歌ふか、大抵商頌簡古にして看難し、辭斷えて意續す、熟讀して自から見るべし。

天命玄鳥　降而生商　宅殷土芒芒　古帝命武湯　正域彼四方　方命厥后　奄有九有　商之先后　受命不殆　在武丁孫子　武丁孫子　武王靡不勝　龍旂十乘　大糦是承　邦畿千里　維民所止　肇域彼四海　四海來假　來假祁祁　景員維河　殷受命咸宜　百祿是何

天玄鳥に命じて、降りて商を生ましむ、殷の土の芒芒たるに宅せり、古帝武湯に命じ、域を彼の四方に正さしむ、方厥の后に命じて、九有を奄有す、商の先后、命を受くること殆からず、武丁の孫子に在

り、武丁の孫子、武もて王として勝たざるは靡し、龍旂十乘、大糦是れ承ぐ、邦畿千里、維民の止まる所、域を彼の四海に肇き、四海來り假れり、來り假ること祁祁たり、景の員は維河のごとし、殷命を受ること咸宜し、百祿是れ何ふ、

【句釋】天命玄鳥、『傳』に玄鳥は鳦なりと。燕鳦、又燕乙、羽の色玄し故に是の名あり、湯の先祖、有娀氏の女、簡狄、高辛氏に配す、帝率ゐて之と郊禖に祈る、時に燕卵を落して簡狄之を呑む、而して後契を生む。降而生商、契は長じて堯の司徒と爲り、功あり商に封せらる、商を生むにあらず、實は契を生むなり、然れども契の後裔は商なり、是の故に生商にて毫も妨げなきなり。宅殷土芒芒、宅は居宅、契より八遷して湯に至る、始めて亳の殷地に宅る、而して命を受て國日に以て廣大芒芒然たり、是れ皆天の命ずる所。古帝は卽ち天帝。命武湯、威武の德ある成湯に命じて、正域彼四方、成湯は天帝の命を受て、以て四方の境域を正し、以て土地人民を治む。方は四方。命厥后、諸侯を指して后と言ふ。奄有九有、九有は九州なり、九州を奄有して遂に之が王と爲る。商之先后、湯を指して先后と言ふ。受命不殆、湯は天命を受て之を行ひ、危殆ならざる也。在武丁孫子、武丁は湯より二十世の天子高宗是れなり。商道を復興して大功あり、在位五十九年にして死す、孫子は今日祭に主たる王を指すならんか、武丁より紂王に至る僅かに八代、此の中間に在る王と思はるるも、誰たるやは分明に知れず。武丁孫子、再度





此の語を擧ぐ、彼は上を言ひ、此れは下の句を起す。武王、朱子曰く、武王は湯の號にして、其の後世亦以て自稱すと。『箋』曰く、高宗(丁武)の孫子、武功ありて、天下に王德あるもの勝服せざる所無きなり。今乃ち『箋』を可とす、武を以て王たる人なり、武王と云ふ名詞にあらざるなり。靡不勝、武にて何事も成らざるは靡し。龍旂、諸侯の旂は龍を畫く。十乘は二王の後、八州の大國。大糦、『箋』曰く、大糦は黍稷なり。是承、武丁の孫子に向つて、諸侯が黍稷を承げ來りて以て其の祭事を助く。邦畿千里、維民所止、畿は王畿、王者の畿內、方千里の地、其の民の止る所、千里に過ぎずして、其の封域は如何。肇域彼四海、四海の廣大に及ぶまで、王の治の及ばざる所なし、王畿制ありと雖も、疆域は則ち限無し、中に居て能く外を制すること此の如し、福の孫子に及ぶ見るべし。四海來假、來假祁祁、假は『箋』に至とあり、朱子は格と注せり、至にて可なり、祁祁は多き貌、四海の諸侯、來至せざる無くして、至る者祁祁然として衆多なり。景は『傳』に大。員は均と注すれども、妥ならず。朱子曰く、景は山の名、商の都する所。『古義』括地志に云ふ、宋州の北五十里、大蒙城を景亳と爲す、湯の盟ふ所の地、景山に因て名く。『寰宇記』云ふ、景山は應天府楚丘縣の北、三十八里に在り、卽ち今日河南省歸德府の東南なり。員は卽ち周なり。維河、景山の四周は皆河、形勢堅固知る可きなり。殷受命咸宜、百祿是何、何は荷なり、殷が天より受る所の命、土地に於る、人民に於ける咸宜し乃ち以て多福を負荷する所以なり。

【評論】玄鳥は一章二十二句。『傳』に高宗を祀る爲めの詩なり。『箋』曰く、高宗を祫するなり。高宗、中宗を契の廟に合祭し是の詩を歌ふなり。祫は合なり、古は君の喪三年既に畢り、其の廟に禘して後に太祖に祫祭す、明年の春、羣廟に禘す、此れより後、五年にして載ち殷祭す、一禘一祫、春秋之を大事と言ふ。顧氏曰く、以上三詩毎章俱に二十二句、音節の用、必ず其の故あらん、然れども考ふべからず。

濬哲維商　長發其祥　洪水芒芒　禹敷下土方　外大國是疆　幅隕既長　有娀方將　帝立子生商

【句釋】濬は德の深きなり。哲は智の勝れるなり。長發其祥、商天命を受くる、其の發見の祥は既に遠きを言ふなり。洪水芒芒、禹敷下土方、禹王は今日の所謂土木技師にして、水利を通ずるに神術を有せしなり。外大國是疆、禹は洪水を治めて其の德天下を服せしかば、三千の羣后之を推して元首と爲し、都を今日の山西省解州、卽ち當年の安邑に奠む、外の大國と中國とを境界し、以て其の中央を占む。幅は廣。隕は均、又圓、圓は周なり。既長、土地を有する廣大に至れば、其の王の德も隨て廣大なるなり。





有娀方將、有商命を受るの祥は、濬哲相繼の時に在りと雖も、有商命を受るの基は、實に有娀商を生むの日に定る、必ず有娀を言ふもの、契固より商人の由て生ずる所にして、有娀又商人の自て出る所、猶ほ稷固周人の由て生ずる所にして、有邰又周人の自て出る所と云ふが如き也。帝立子生商、孔氏曰ふ、上天契を祐け賢ならしめ、有商の國を生しむるを謂ふ。商は一代天下を有つの號、商を生むは契を生むを謂ふ、契商に封せられて、商因て以て興る、是れ契を生むは商を生むの所以なり。『古義』曰ふ、帝は天の主宰、篇中三たび帝を擧ぐ、皆天を指して言ふ。子生の二字連讀す、下の商字と相連ねず、其の女子の生む所と謂ふは、正に契を指すなり。金履祥曰ふ、生は猶ほ甥のごとし、帝有娀氏の女の生む所の者を立て商と爲すを謂ふなり。此の說亦要に可なり。

玄王桓撥　受小國是達　受大國是達　率履不越　遂視既發　相土烈烈　海外有截

玄王桓く撥め、小國を受けても是れ達る、大國を受けても是れ達る、履に率つて越えず、遂に視して既に發れり、相土烈烈として、海外截ふるあり、

【句釋】玄王は契を指す、商は是れ水德、黑帝の精、故に帝を黑帝と云ふ（玄ハ黑ナリ）の說と、玄鳥下りて生るるを以て玄王と稱するなりとの說とあり。二說共に通ず。桓は『傳』に大とあり。朱子は武なりと。

桓は一名をべ檽子と云ふ、此の樹質固く又極めて大木と成る、是を以て威武の義に取り、又大の義に取る、共に妨げなきなり。撥は治なり。受小國是達、受大國是達、才伯云ふ契敎化の責に任ずるときは四方小大の國、皆其の受る所達る、敎化流行して罣礙する所無きを謂ふ。率履不越、此の語を解して『箋』曰く、其の民をして禮に循ひ、踰越することを得ざらしむ。自にあらず、他をせしむる意とす。朱子の說に依れば契能く禮に率うて過越ならずと。他にあらずして、自の事なり。他に及ぼすは先づ自よりす。朱說從ふべし。遂視既發、自から省視し而して他を省視し、敎令一たび發すれば則ち盡く行ふなり、民亦之に背かず、相土は人名、昭明の子、契の孫なり。鄭玄言ふ、相土契の業を受け、入て王官の伯と爲り、出て諸侯の長と爲る。王肅言ふ、相土が夏に在る、司馬の職と爲り征伐を掌る。『古義』曰く、此の二說要するに詩辭を以て之を想像するなり、殊に明據無し。『竹書紀年』帝相十五年、商侯相土乘馬と作る、遂に商邱に遷る。『左傳』陶唐氏火正閼伯商丘に居る、相土之に因る、此の二說合す。其の乘馬と作ると言ふは、此の詩詠ずる所なり、乘馬は卽ち旬賦なり、班固が『漢志』曰ふ、殷周兵を以て天下を定む、司馬の官を立て、六軍の衆を設け、井田に因て軍賦を制す、四井を邑と爲し、四邑を丘と爲す、丘は十六井なり、戎馬一匹、牛三頭あり、四丘を旬と爲す、旬は六十四井なり、戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、卒七十二人、干戈備具す、是を乘馬の法と言ふ。今『竹書』載る所に據るときは、





乘馬の法は夏后の世、相土固より先づ之を爲すなり。烈烈は威武の盛んなるなり。海外有截、四海の外、率服し截爾として整齊する、相土は其れ此の如く盛んなり、然るに湯は七十里の地を以て起る、中世の衰へたること知るべきなり。

帝命不違　至于湯齊　湯降不遲　聖敬日躋　昭假遲遲　上帝是祗　帝命式于九圍

帝命違はず、湯に至りて齊し、湯の降ること遲からず、聖敬日に躋る、昭假遲遲たり、上帝是れ祗しむ、帝命じて九圍に式せしむ、

【句釋】帝命不違、至于湯齊『箋』曰く、天の契に命ずる所以の事、世世之を行ひ、其の德浸く大、湯に至りて天心に當る。朱子曰く、湯齊の義、未詳。蘇氏曰く、湯に至りて王業成る、天命と會するなり。此の說然り何ぞ未詳と言ふに足らん、湯に至りて集大成、所謂整齊せるなり。湯降不遲、湯の降下正しく其の時を得て遲しと爲さざるなり。聖敬日躋、民之を聖として敬し、其の德日日に躋升する。昭假遲遲、其の德昭昭として天に假り久しくして息まざるなり。遲遲は急急の反對、久長を意味する。上帝是祗、祗は敬と同じ。帝命式于九圍、九州を九圍と言ふ。孔氏曰ふ、九州を九圍と言ふは蓋し天下を九分して九處と爲し、規圍然たるを以てなり、殊に知らず、圍を以てしたるは偕韻のみ、何ぞ孔氏の如き理

窟あらん。式は法、帝湯をして立法の主人公と爲らしめたるを言ふ。

受小球大球　爲下國綴旒　何天之休　不競不絿　不剛不柔　敷政優優　百祿是遒

小球大球を受け、下國の綴旒と爲り、天の休きことを何へり、競せず絿せず、剛ならず柔ならず、政を敷くこと優優として、百祿是れ遒まれり、

【句釋】受小球大球、『傳』に球は玉とあり。『箋』曰く、湯既に天の命ずる所と爲る、則ち小玉を受く、尺二寸の圭を言ふ、大玉を受るは斑を言ふなり、長さ三尺、圭を執り斑を搢て以て諸侯と會同するなり、之を受るは天子と爲るの謂なり。爲下國綴旒、下國は諸侯を指す、綴は結なり、旒は旗の垂るもの、旗の竪一幅を縿と言ふ、縿に付したる衆幅を旒と言ふ、諸侯が天子に付く宛かも旗縿の衆旒に付かるるが如きを譬ふるなり。何は荷。天之休、休美の命を荷ふなり。不競不絿、競は『箋』に逐とあり、逐はざるは人と前後を爭はざるなり。朱子曰く、競は强、絿は緩と。『說文』曰く、絿は急なり。『左傳杜注』も然り、後儒異を好み乃ち緩を以て絿字を釋くと、事を執ること緩緩たるなり、不緩とは反對の意味なり。朱子は今取らず。不剛不柔、剛に過ぎず、柔に過ぎず、中庸を得るの謂なり。敷政優優、百祿是遒、優は其の人裕にして餘地あるの謂ひ、遒は聚なり、百祿總て天子の一身に聚まるなり。





受小共大共　爲下國駿厖　何天之龍　敷奏其勇　不震不動　不戁不竦　百祿是總

小共大共を受け、下國の駿厖と爲る、天の龍を何ふ、其の勇を敷奏し、震かず動かず、戁れず竦かず、百祿是れ總べたり、

【句釋】小共大共、『傳』に共は法とあり。『箋』に共は執なり、猶ほ執搢する所の小球大球の如きなり。朱子曰く、此の義未詳。或は曰く小國大國共する所の貢なり。蘇氏曰く、共は珙と通ず、合珙の玉なり。此の蘇氏の說と『箋』と合するものの如し。爲下國駿厖、駿は大、厖は厚と『傳』にあり。董氏曰く、駿厖は『齊詩』に駿駹に作る、馬を謂ふなり。胡氏曰く、駿駹は是れ其の力量ありて、能く重を負ひ遠きを致すの意を喩ふ、下國皆我に於て負載するなりの說駿厖は馬なりと謂ふの說に從ふ可し。此の如くなるときは上章綴旒の義と相類す。皆是れ辟喩、上章は政事を言ひ、此の章は武功を言ふ。先づ能く自治して然して後其の武功に進むなり。是れ鄭氏の大厚の說を破る。鄭氏も亦誤無しと言ふべからず。何天之龍、龍の寵たるは異議なし、天の寵を荷ふとなり。敷奏其勇、其の勇の及ばざる所なきを以て敷奏と言ふ。不震不動、不戁不竦、輔氏曰く、震動せず、戁竦せざるは、則ち周頌に所謂、無貳無虞の意、大事に臨む、固に懼れずんばあるべからず、

然れども神武にして殺さざる者は、自から能く震動せず、戁竦せず、天の休を何ふときは政事を脩む、天の寵を何ふときは武功を進む、亦其れ宜なり。大變に處しても、大事に臨んでも、全く震動戁竦を身に覺ゆること無きを言ふ。徐光啓曰く、震動は張皇繹騷の意あり、太過に屬するに似たり。戁竦は懼懼畏葸の意あり、不及に屬するに似たり。當時聖人師を行る、實に是れ天に代つて事を行ふ、臣を以て君を伐つ、宇宙未だ有らず、人情の駭く所と雖も、彼の直蕩然として、牽くこと無く、礙ること無く、疑はず沮まず、著衣喫飯の如く相似たり、何の周章あらん、何の退縮あらん。故に君子の中庸と曰ふなり、常人、一毫の私意あれば、便ち震懼を禁ぜず、神氣常を改め、舉止故を失するなり。徐氏是の說、達見と謂ふ可し。百祿是總、前章と意義同じ。

武王載旆　有虔秉鉞　如火烈烈　則莫我敢曷　苞有三蘖　莫遂莫達　九有有截

韋顧既伐　昆吾夏桀

武王旆を載せ、虔んで鉞を秉る有り、火の烈烈たるが如く、則ち我を敢て曷むること莫し、苞三蘖あれども、遂ぐること莫く達ること莫し、九有截ふることあり、韋顧既に伐ちぬ、昆吾夏桀をさへに、

【句釋】武王は武を以て王たるの謂ひ、卽ち湯を指す。載旆、翻旆と言はずして載旆と言ふは、古は旆を兵車上に樹てたるものなればなり、征伐に赴くを言ふ。有虔秉鉞、虔は妄にあらざるの謂ひ、無道を





誅するは是れ止むを得ず、天に代つて罪を討ず。如火烈烈、則莫我敢曷、『傳』に曷は害なりと。『箋』も害の義を取る。朱子曰く、曷は遏と通ず。『說文』曰く、害は曷の假借字、詩書多く害を以て曷と爲す、『釋詁』に曷は止なり、此れ曷を以て遏と爲す。『釋言』に曷は盍なり、然らば禦害と注するも、止と注するも義は同じきなり、我が威烈の前には何人も敢て止むるを得ずとなり。苞は『說文』に草とあり。師古曰く、今用て席に作る所の本なり。『傳』にも本と注せり。有三蘖、蘖は和訓「ヒコバヘ」、本の旁に生ずる萌蘖を言ふ。一本に三蘖を生ずるは何ぞ。朱子曰く、本は夏の桀王之に韋と顧と昆吾の三人を加へて言ふ。『古義』曰く、葛、有雒、荆、溫、皆次第に夷滅す。獨韋と顧と昆吾の三國後に亡ぶ、故に蘖を以て稱す、桀此の三國を樹て、私黨と爲す、故に苞有三蘖と曰ふ。莫遂莫達、桀と韋と顧と昆吾の四國、望を遂ず、志を達せずとなり。九有有截、天下九州悉く截然として湯に歸向する。韋顧既伐、昆吾夏桀、『竹書』に桀二十八年に昆吾氏商を伐つ、商諸侯を景亳に會して遂に韋を征す、商の師韋を取り、遂に顧を征す、二十九年商の師顧を取る。三十年商の師昆吾を取る、三十一年、商陋より夏の邑を征して昆吾に克つ、大雷雨、鳴條に戰ふ、夏の師敗績す、桀三朡に出奔す、�に戰うて桀を焦門に獲て、之を南巢に放つ、韋氏は今の直隸、顧氏は山東、昆吾も山東、桀は山西なり。

昔在中葉　有震且業　允也天子　降于卿士　實維阿衡　實左右商王

昔中葉に在りて、震あり且業し、允なるかな天子、卿士を降せり、實に維阿衡、實に商王を左右す、

【句釋】昔在中葉、『傳』に中葉は中世とあり。『箋』に中世は相土を謂ふと。朱子は、中世衰へし時なりと言ふ。恐くは相土にあらざるべし。有震且業、震は『箋』に威と解す。朱子は懼とす。威と解する故に相土と言ふ。懼と解する故に衰世と言ふ。今衰世と見て可なり。業は危なり、湯の以前に於て國實に危きことありしなり。允也天子、是に於て允なる天子出て以て天下を司配せざるべからず、湯を指しこの天子とす。降于卿士、實維阿衡、湯を助けて功を樹し人を伊尹とす、此の伊尹を稱して阿衡と言ふ。阿衡は官名、卿士は兼官と知るべし。左右は二字にて「タスクル」なり、商王を左右すと言へば、商王を自在に使用するが如くに見ゆと雖も、そは後世の釋にて今此の句は商王を扶助する意味なり、先ならず後ならずして此の聖主あり、亦先ならず後ならずして此の阿衡あり、宗廟に配享する固に其の所なり。

【評論】長發は七章、一章は八句、四章は七句、一章は九句、一章は六句。子夏曰く、長發は大禘するなり。『箋』曰く、大禘は天を郊祭するなり、王者其の祖の自て出る所を禘するに其の祖を以て之に配す、是の謂なり。卿士を以て禘に與かり祭る、榮なりと謂ふ可し。





撻彼殷武　奮伐荆楚　采入其阻　裒荆之旅　有截其所　湯孫之緒

撻たる彼の殷武、奮つて荆楚を伐つ、采く其の阻に入る、荆の旅を裒め、其の所を截ふることあり、湯孫の緒なり、

【句釋】撻は『傳』に疾意とあり、兵を用ふる神速なるを謂ふ。殷武は殷王武丁なり、武丁は高宗。奮伐荆楚、荆と楚とは二國にあらず、楚は乃ち荆の別名、武丁が奮然として荆楚卽ち夷狄を征伐する。采は深なり。朱子は冒と言ふ。冒にはあらず。入其阻、深く楚地の險阻に入る。徐光啓曰く、荆楚左に江陵を控へ、右に黔中を控へ、南蒼梧を負ひ、北涇塞に依る、險阻の國なり。司馬遷曰く、荆楚は慓勇輕悍にして好んで亂を作す。乃ち古より之を記す。裒は聚。荆之旅、旅は衆、荆州の人民を悉く聚めてなり。有截其所、荆州をして截然として王化に齊一ならしむ。『易』に鬼方を伐つ三年にして之に克つとあるは、乃ち此の事なり。湯孫之緒、湯孫と言へば卽ち太甲にて、高宗より數百年前の人なり、然るに高宗を嘆ずる詩に於て湯孫之緒と言ふ、高宗も亦湯の子孫なればなり。『箋』に湯孫太甲の功業と言ふは今取らず。

維女荆楚　居國南鄉　昔有成湯　自彼氐羌　莫敢不來享　莫敢不來王　曰商是常

維女荆楚、國の南鄉に居れり、昔成湯あり、彼の氐羌より、敢て來享せざるは莫し、敢て來王せざるは

莫し、曰く商是れ常なりと、

【句釋】維女荆楚、荆楚の全體に對して責問する語。居國南鄉、荆楚は今日の湖北省荆州府江陵縣の地なれば、人の稱して南方支那と呼ぶ處、鄉は方と意味同じ。昔有成湯、湯は高宗の世を去る四百年も前なれば昔と云ふ。自彼氐羌、孔氐曰く、氐羌の種、漢の世仍ほ存す、其の居秦隴の西に在り、故に知る西方に在ることを。乃ち今日の甘肅より四川の地へ度りしものなり。莫敢不來享、莫敢不來王、殷は安邑卽ち今日の河南省河南府に都せしものなれば、地理の遠近を論ずれば荆楚は近く、氐羌は遠し、然るに其の遠きものが、或は來享し、或は來王し、我を君として服せざるは莫し。曰は、氐羌が曰くなり。商是常、『箋』に常君とあり、朱子は常禮と注す、君と奉ずる故に來享の禮を取る、禮を取るが故に君なり。享は『說文』に獻とあり、珍物を攜へ來つて獻ずるを言ふ。來享と來王と來朝とに就て云云する者あり、皆臣として來るを言ふ、特別の義が享と王と朝とにあるにあらず、我に禮あり女荆楚それ何ぞ來らざるや。

天命多辟　設都于禹之績　歲事來辟　勿予禍適　稼穡匪解

天多辟に命じて、都を禹の績に設けしむるも、歲事には來辟す、予を禍適すること勿れ、稼穡解らず、

【句釋】天命多辟、多辟とは多くの君主なり、辟を君と解す、辟は元來法と解す、其の法を行ふ者は君





なるを以てなり。此の多辟は『箋』の如く諸侯と見る可し。設都于禹之績、禹の都は安邑卽ち今日の山西省解州なれば、其の績に設けしと云ふ意にはあらず、禹が治水せる所の地を指して禹の績と云ふならん。歲事來辟、天下の羣侯、此の歲、彼の歲と分擔して商に來朝するなり。勿予禍適、予は我なり。諸侯曰く、我を禍適すること勿れ、是れ王の譴めざるを祈る辭なり。諸侯己が功を言はずして、罪する勿れと云ふ。適は通じて謫と作す。『說文』に罰とあり、禍は重く、謫は輕し。稼穡匪解、諸侯歲事の常を脩めて、獨稼穡匪解と言ふは其の重きを擧るなり。孟子、天子の巡狩を載するに唯土地田野を以て、慶讓の先とするを觀て見る可し。徐光啓曰く、凡そ遠近の人、聲勢相應ず、內足らずして遠攻するときは近者伏して隙を伺ふ、內餘りありて遠く服するときは近者畏れて萌を消す、荆楚平らぎて、諸侯朝す、勢之を使むるなり、句法妙品と。

天命降監　下民有嚴　不僭不濫　不敢怠遑　命于下國　封建厥福

天命降監せり、下民も嚴なるあり、僭はず濫ならざれ、敢て怠り遑あらず、下國に命じて、封に厥の福を建てん、

【句釋】天命降監、監は監視、普通の觀にはあらず。下民有嚴、朱子曰く、天命降監、他に在らず、皆民の視聽に在り、則ち下民亦嚴なるあるなり。不僭は賞の僭はざるなり。不濫は刑の濫ならざるなり。

賞罰共に正し。不敢怠遑、敢て政事に於て怠惰自暇せざれとなり。命于下國、封建厥福、一國の君主が政事心術を正しうせば、天は諸侯に命じて、封に厥の福を建てん、是れ亦楚を警告するの辭。

商邑翼翼　四方之極　赫赫厥聲　濯濯厥靈　壽考且寧　以保我後生

商邑翼翼たり、四方の極なり、赫赫たる厥の聲、濯濯たる厥の靈、壽考にして且寧し、以て我が後生を保んぜり、

【句釋】商邑は京師。翼翼は整正せる形容。四方之極、四方の中正を言ふ。赫赫厥聲は顯然として盛んなる義なり。濯濯厥靈は神の精明が甚だ光あるなり。壽考且寧、以保我後生、今の王壽考にして且安寧なるときは、亦我が後生卽ち子孫を保んずること明白なり、其の孫、祖甲は在位三十三年、帝乙は三十七年に至る、短と爲さざるなり。是れも重ねて楚に警告する辭。

陟彼景山　松柏丸丸　是斷是遷　是斲是虔　松桷有梴　旅楹有閑　寢成孔安

彼の景山に陟れば、松柏丸丸たり、是れ斷り是れ遷し、是れ斲り是れ虔る、松桷梴きことあり、旅楹閑なるあり、寢成りて孔だ安んぜり、

【句釋】陟彼景山、景山は商の都に在り。丸丸は松柏の易直なるをいふ。是斷是遷、是斲是虔、松桷有梴、旅楹有閑、寢成孔安、謝疊山曰く、彼の景山に登りて、材を選び、松柏の易直なるを取て之を斷り、





之を遷し、繩墨を以て方正を取り、之を斲り之を削る。松を以て椽桷と爲す、梴然として長きあり。松柏を以て梁楹と爲す、閑然として大なるあり。劉氏曰く、『商書』曰く、七世の廟、以て德を觀る可し、蓋し天子の七廟、三昭三穆、太祖の廟を與にして七、八世九世にして而して後、其の昭穆に隨うて親盡くれば遞に其の主を遷して、太祖の廟に祧し、其の功德あるの君は、後世之を宗とす、親盡くと雖も祧せず、別に百世不遷の廟を立て、特に其の主を祔す、功德ある者皆然り、初めより預じめ其の數を限るべからず。商には則ち止三宗、高宗卽ち其の一、然れども嘗て疑ふ高宗の廟、未だ知らず何の所に立ることを。三宗の後昭穆當に祧すべき者、未だ知らず何の廟に入るを。竊かに意ふ立る所三宗、中宗穆に當る、高宗祖甲昭に當る、各の昭穆の位に隨うて、特に其の廟を太祖の廟の兩旁、三昭三穆の上に立つ、周の文武世室の位の如きなり。中宗の後は則ち羣穆之に繼ぎ、皆其の廟に祧す。高宗祖甲の後は、則ち羣昭の之に繼ぐもの皆其の廟に祧す。周の文王以後羣穆、文の世室に祧し、武王より以後、羣昭武の世室に祧するが如し。

【評論】殷武は六章、三章は六句、二章は七句、一章は五句。子夏曰く、殷武は高宗を祀る詩と。或は曰く、高宗の七世の孫、帝乙の時作れる詩ならんと。安成の劉氏曰く、此の詩と閟宮と全篇の文意相似たり、但閟宮は僖公宗廟を脩むるを頌する爲めに作り、此は武丁を宗とし特に廟を立つるが爲め作る。

22075



商頌五篇、十六章、一百五十四句。

國譯詩經終

7302
4

購入

衆議院
4.3.25
書館



國譯漢文大成 經子史部第三卷 【非賣品】

大正十年八月二十二日印刷
大正十年八月二十五日發行
大正十一年二月二十八日再版發行
大正十三年三月十五日三版發行

編輯兼發行者 國民文庫刊行會 東京市本郷區西片町十番地

右代表者 鶴田久作 東京市本郷區西片町十番地

印刷者 土谷清隆 東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 株式會社博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 電話小石川五三〇二番 振替東京一八五七二番 國民文庫刊行會

著作權所有